

ひがし北海道価値創造パートナーシップ会議
～新たな北海道総合開発計画の推進に向けて～

日時:平成 28 年 4 月 27 日 14:30～17:00

場所: ホテル日航ノースランド帯広

2 階「ノースランドホール」

次 第

1. 開 会
2. 北海道局長挨拶
3. 出席者紹介
4. パネルディスカッション
5. 太田前国土交通大臣のコメント
6. 閉会

1. 開 会

○**小林開発計画課長** 「ひがし北海道価値創造パートナーシップ会議～新たな北海道総合開発計画の推進に向けて～」を開会したいと思います。本日は皆様お忙しい中、多数の方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。私、進行を担当いたします、北海道開発局の小林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

平成 28 年 3 月 29 日に新しい北海道総合開発計画が閣議決定されました。お手元の資料の中に、新たな計画についてのパンフレットと、1 枚ものの概要がございますので、後ほどご覧いただければと思います。

この新しい計画は「世界の北海道」をキャッチフレーズとし、これからの 10 年間のビジョンを示したものとなっています。新しい計画で戦略的産業として「食」と「観光」が位置づけられておりますが、道東 3 圏域、ひがし北海道はとりわけポテンシャルの高い地域として期待されております。また「世界の北海道」のためには、地域づくり人材の発掘についても重点的に取り組む必要があります。

今日の会議は、ひがし北海道において課題解決、地域活性化に向けて取り組んでいる方々をお迎えいたしまして、世界に目を向け夢と希望の新時代幕開けの契機とすべく、より実効性の高い計画推進方策についてご意見を伺うことを目的として開催させていただくものでございます。

本日の会議はマスコミを含む一般の方々にも傍聴いただいております。会場には衆議院議員の中川郁子様がお見えになっております。他に、十勝地域の議会議員の方々、多数おいでいただいております。

まず、机上に配布していました本日の配布資料でございますが、会議次第の他、新たな計画に関するパンフレットの概要、それから資料の番号、2 から 5 となっていると思いますが、パネリスト様のご提供資料が入っております。もし何か、過不足がございましたら、事務局の方にお申し付けいただきますようお願いいたします。

なお、本日の議事録あるいは資料につきましては、後日国土交通省の方のホームページに掲載することを予定しておりますので、あらかじめご承知おきください。

それでは、本会議を開催するに当たりまして、国土交通省を代表いたしまして北海道局長の岡部和憲から一言ご挨拶を申し上げさせていただきたいと思います。

2. 北海道局長挨拶

○**岡部北海道局長** 皆様どうもこんにちは。国土交通省北海道局長の岡部でございます。今日は、ひがし北海道価値創造パートナーシップ会議ということでございます。開催に当たりまして、主催者として一言ご挨拶をさせていただきたいと思います。

まずは、今日この会場に多くの皆様おいでいただきまして誠にありがとうございます。また、前列の方におられますが、ご参会いただいたパネラーの皆様、コーディネーターをお引き受けいただいた北海道大学の小磯先生、それから、まだ到着しておりませんが、コ

メンテーターをお願いしております、太田昭宏前国土交通大臣も後ほど会場にお着きになられるということでございます。

改めて、ご参加の皆様にご挨拶と御礼を申し上げます、どうもありがとうございます。

本日の会議はこのタイトルにもありますように、先般、政府として決定いたしました新しい北海道総合開発計画がございますが、この推進に向けての第一歩となる会議というふうに考えてございます。

挨拶の機会をお借りしまして、その内容をかいつまんで若干ご説明したいと思います。皆様のお手元にお配りしている資料の中に、1枚もののチラシで、「世界の北海道」と書いたものが入っておりますので、それをご覧頂きながら見ていただくとありがたいと思います。

皆様ご案内のとおりであります、そのチラシの上の方にあるように、北海道では現在人口減少、高齢化が急速に進展しております。非常に厳しい状況を迎えている地域も出てきております。ところが一方で、北海道の高品質でおいしい農水産物の評価が高まって、海外への輸出も拡大しているところでございます。

資料にありますように、ここ数年で3倍くらいに海外への食料品等の輸出が増えてきております。また、海外からの観光のお客様も非常に急速な勢いで拡大しているところでございます。資料に書いてありますように、ここ数年で5倍に増えているということでございます。

これは、平成26年度で154万人と書いておりますが、おそらく昨年度は200万人に達したと考えられております。さらに、ますます増えていくのではないかと考えております。

そのような状況ですので、いわば現在の北海道はピンチとチャンスと同時に迎えているということではないかと考えております。人口減少で厳しい局面ですが、食の輸出あるいは観光という面で見ると、非常にチャンスもある時代を迎えているのではないかと考えております。

そういった状況も踏まえて、新たな北海道総合開発計画では、目標といたしまして、北海道の食と観光を戦略的産業と位置付けまして、これを発展させていって世界の北海道を目指すということが一つでございます。

それから、もう一つは、食と観光を支えている地域、これは都市圏にも一部ありますが、都市圏以外の農産物を作っている地域あるいは観光資源になっている地域が、食と観光に対する新しい価値を生み出していると理解しております。

したがって、そういう地域をしっかりと住み続けられる地域として支えていくということが、先ほど言いました世界の北海道を実現する上での大きなキーワードではないかと考えているところでございます。

具体的に申し上げますと、チラシの下の方に枠囲みをしております、一つは何と云っても地域の暮らし、それをきちんと維持していくための機能を圏域の中できちんと分担しな

がら、あわせて圏域内外の物流や交通のネットワークといった基盤をしっかりと整備していくことです。

それからもう一つは、農林水産業の競争力です。今でも北海道はかなりありますが、そういうものをさらに高めて、海外輸出なども促進しながら、魅力と成長力のある産業に発展させていくことが二つ目の重点テーマでございます。

それから三つ目といたしましては観光でございます。観光資源の新たな発掘や一層の充実、あるいは広域の連携、あるいは観光と観光以外の産業との連携といったようなことを重点的に進めまして、何とか世界水準の観光を北海道の中につくっていききたいというふう考えているところでございます。

そうすることによって、本当の意味で北海道における観光が、北海道の主要産業にしていけるのではないかと考えているところでございます。

そして、四つ目はチラシの左下の方に書いてありますが、それらの取組を進める上で非常に重要なのは、何といても人材ではないかと考えております。北海道の中で、そういうことにチャレンジし、担っていく人々を発掘し、育成していくということが非常に大きな課題と考えておりまして、今般進めさせていただいておりますパートナーシップ会議も、そういった意味合いも込めながら開催させていただいているところでございます。

これまで計画を作る段階で、道内各地で様々な方からいろいろな意見をいただいて進めてまいりましたが、今度は計画を実現、実践していく上でも地域で活躍している方との連携が非常に重要だと考えております。

本日はその第一弾ということで、「ひがし北海道」という言い方をしておりますが、北海道の中でも非常に高いポテンシャルを持っているこの地域において、地域でいろいろ活躍されている皆様から様々なご意見をいただきながら、本計画の推進に生かしていきたいと考えているところでございます。

また、さらに申し上げれば今日ご参会いただいているパネラーの皆様だけではなくて、会場においでの皆様におかれましてはこの計画の推進に一緒に取り組んでいただく、あるいは参加いただくことで、一層大きな力として北海道の新しい価値、あるいは未来を創造していけるのではないかと考えているところでございます。

本日は1部、2部、3部という3部構成でおおむね17時くらいまでを目途に開催させていただきますので、最後までご清聴いただければありがたいと考えているところでございます。

以上、簡単ではございますが、「ひがし北海道価値創造パートナーシップ会議」の開催に当たりまして、一言ご挨拶と御礼を申し上げます。本日は誠にありがとうございます。

3. 出席者紹介

○小林開発計画課長 ありがとうございます。報道の関係者の方々はじめ、傍聴の皆様

のカメラ撮影は一旦ここまでとさせていただきます。演壇のほうを作り変えさせていただきますので、少々お待ちください。

それでは引き続きまして、パネルディスカッションを進めさせていただきたいと思えます。恐れ入りますが、パネリストの皆様、コーディネーター様、ご登壇いただきますようお願いいたします。

まずはご参会いただいておりますパネリストの皆様を五十音順に簡単にご紹介させていただきます。

第 1 部のパネリストでございます。株式会社いただきますカンパニー代表取締役の井田英美子様でございます。有限会社ランラン・ファーム代表取締役社長の林克彦様でございます。合同会社大地のりんご代表社員の道山マミ様でございます。釧路モカ女性プロジェクト代表、森崎三記子様でございます。

続きまして第 2 部のパネリストとしてご参会いただいておりますのは、釧路市長の蝦名大也様でございます。帯広市副市長の田中敬二様でございます。北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議代表の田中夕貴様でございます。続きまして、十勝バス株式会社代表取締役社長の野村文吾様でございます。網走市長の水谷洋一様でございます。コーディネーターを務めていただきますのは、国土審議会北海道開発分科会計画部会委員で、北海道大学公共政策大学院特任教授の小磯修二様でございます。なお、コメンテーターとしてご参会いただきます、衆議院議員前国土交通大臣の太田昭宏様におかれましては用務の都合によりご来場が遅れておりますので、ご来場の際に改めてご紹介させていただきたいと存じます。

それでは、ただいまから第 1 部「地域づくり人材の発掘・育成」、および第 2 部「世界のひがし北海道 2050」をテーマにパネルディスカッションを始めさせていただきます。これから先の進行につきましては、コーディネーターの小磯様をお願いさせていただきたいと存じます。小磯様よろしくお願いいたします。

4. パネルディスカッション

○小磯氏 はい。これからパネルディスカッションの進行役を務めさせていただきます、北海道大学の小磯でございます。よろしくお願いいたします。

今日はパネリストの数が、コメンテーターを入れると 10 名、コーディネーターを入れると 11 名になります。しかも限られた時間でのパネルディスカッションということで、進行役としては大変重い役割を背負っておりますが、できる限り効率的に進めていきたいと思えます。皆さん、ご協力をよろしくお願いいたします。

先ほど北海道局長の岡部さんからご説明がありましたが、新しい北海道総合開発計画が 3 月下旬に閣議決定されました。北海道は戦前から継続的に、国が長期計画を策定し、ブランドデザインを示しながら地域づくりを進めてきたという大変伝統のある地域です。そして、今回、戦後の第 8 期目の計画ができたこととなります。では、それをどのように進め

ていけばいいのでしょうか。先ほどお話がありましたように、生産空間という新しいコンセプトが、今回の計画では提起されております。それを担う地域ということで、第一弾はひがし北海道、帯広の地で、計画の今後の進め方を議論していこうということが本日の趣旨です。ある意味では、節目であり、大切な場ではないかと思っております。

全体の進め方ですが、先ほどご説明がございましたように、第 1 部と第 2 部に大きく分かれております。

第 1 部につきましては、まさに地域でいろいろとまちづくりなど、実践的な活動をされておられる皆さんから、地域づくり人材の発掘・育成という観点でご議論をいただきます。また、第 2 部では「世界のひがし北海道 2050」というテーマで、世界を見つめながらこれからの北海道をどう作り上げていこうかという趣旨でパネルディスカッションを行うという流れになっております。

では、早速、時間の関係もございますので、第 1 部をこれから始めていきたいと思います。第 1 部の進め方ですが、今日お座りいただいている皆さんから、最初に実践事例として、ご自身がどういう取組をされているのかをまずご紹介をいただきます。その後、人づくりという観点から、それぞれご意見をいただくという流れで進めていきたいと思っております。

では、実践事例のご報告のトップバッターは井田さんです。よろしくお願いいたします。

○井田氏 皆さん、こんにちは。いただきますカンパニーの井田英美子と申します。今日は 5 分という短い時間ですが、弊社の事例報告をさせていただきたいと思っております。資料は、2-1 と書いてあります、写真がついたものと、パンフレットがお手元にあると思います。今日は時間が短いので、文章が書いてある資料に細かい内容が書いてございまして、後ほどご覧いただければありがたいと思っております。

いただきますカンパニーと聞いて、なんだかおいしそうな名前だなということで、よくおいしいお店を教えてくださいという電話がかかってくるのですが、実は飲食店ではありません。農家でもありません。私は、日本で初めて畑ガイドという仕組みをつくりました。この帯広市を拠点に、十勝管内には農家さんが 6,000 軒ありますが、その農家さんたちの畑、美しい風景を観光資源に活用しない手はないと考えました。でも、農家さんに畑を見せてください、収穫体験をさせてくださいとお願いをしても、ほとんどが専業農家さんで、非常にお忙しく、一日を逃すまいと農作業されております。農家さんの観光客の受け入れは、実は現実的ではないという現状がこの地域にはあります。そこで、すべてを農家さんにお任せするのではなく、地域に住む私たちが代わりにガイドをする仕組みを作ることで、より多くのお客様に十勝の農業を知っていただくということで始めました。

今年で 5 年目になります。始めた当初のお客様は 100 人程度だったのですが、3 年目は 1,000 人、4 年目は 2,000 人と増えております。今年は最低でも 3,000 人、4,000 人を目標に、今受け入れに向けて準備を進めているところです。

1年目は、ほとんど地元の方にPRする程度のことしかできませんでした。私は、小さな子どもを2人抱えながら会社経営をしております。子育てサークルを母体にして、農業体験活動を始めたのがスタートです。

その後、1年目は十勝管内、そして2年目によりやく全道に情報を届けることができました。そして、3年目は全国、主に首都圏へ情報が届いたのですが、その途端にお客様がたくさんいらっしゃったという状況です。おかげさまでこの4月からまた職員を1名採用して体制を整備しております。

夏場だけにお客様が多いので、この時期のために主に高齢者の方々を雇っていますが、冬の間に研修してもらっています。常勤の事務局3名に加えて、その高齢者ガイドさんが他に16名おり、地元の人たちでお客様を受け入れしているという状況にあります。

観光業界はどこでもいわれていますが、課題はやはり夏にお客様が集中するということで、これは本当に永遠の課題です。ただ、弊社では冬の間は地元の子どもたちへの食育事業で何とかやっている状況です。

新しい観光事業を始めるに当たって、非常に大変だったのは最初の2年間です。3年目によりやくお客様が来るようになりましたが、主に道外のお客様がターゲットになってきますので、そこまで情報を届ける期間、非常に長い時間がかかるということを実感しております。この間を何とか持ちこたえる、それが非常に重要だと思っております。

それから、今年はすでに海外のお客様にかなりの数のご予約をいただいています。でも、職員は英語がまったく話せないものがほとんどで、そのあたりの言語の問題がこれから大きな課題になってくるのではないかと感じております。

○小磯氏 ありがとうございます。井田さんの取組は、本当に十勝らしいですね。農業を観光資源にすることが非常に難しい中で、それを着実に実現していただけているという姿で、ぜひ私も体験してみたいという思いがいたしました。ありがとうございます。引き続きご当地で頑張っている林さん、お願いします。

○林氏 皆さん、こんにちは。北海道ガーデン街道代表ならびに有限会社ランラン・ファームの社長をしております、林です。ランラン・ファームでは、ここから45分くらいの場所の清水町にある「十勝千年の森」というガーデン施設の運営をしており、そこではセグウェイガイドツアーやチーズ作りなどをしています。

私からは北海道ガーデン街道の話をさせていただきます。スタートは2008年で、その年にガーデン作りをスタートしました。というのも、十勝には素晴らしいガーデンが当時は四つもあり、今後ガーデンが非常に盛んになるだろうと考えて投資することを決意しました。1年間掛けて作ったので2009年に完成し、結構予算を掛けてやりました。ただ、営業が難しい。東京で旅行代理店に行くと、十勝には見るものがないし、十勝は観光のブランドではないとさんざん言われ、客を送れないというのです。温泉はあるし、食もいいのだけれど、やっぱり見るものがないと言われました。

たくさんのお金を費やしたのになぜ人が来ないのかと銀行さんにも叱られました。これ

はまずいといろいろ考えて、ドイツのロマンチック街道をお手本にすべきだと思うようになりました。ドイツのロマンチック街道はどこの都市かよくわからないのですが、なんとなくイメージが良くて、古城めぐりもあり、風景も良く、素晴らしい地域です。調べてみるとドイツのロマンチック街道は 350km もありました。350km は帯広と札幌を往復するくらいの長い距離です。そこで考えたのが、わずか 2 時間のところにある富良野です。富良野はいまや日本全国、アジアを含めて世界的なブランドです。その富良野をいかに取り込めるかということを考えました。そこで作ったのが、お手元に資料がある北海道ガーデン街道です。

北海道ガーデン街道は約 5 年で旭川、富良野、そして十勝 5 ガーデンで連携し、7 ガーデン（現在は 8 ガーデン）になったのですが、当時延べ 35 万人だったのが、いまや 60 万人ほどにまで増えております。単に連携をして「北海道ガーデン街道」という名前をつけただけなのですが、これが非常に地域連携、観光連携にとって素晴らしい取組だということで非常に評価されました。また、旭川、富良野、十勝は空港との連携もいいのです。旭川空港と帯広空港を使えばちょうど 2 泊 3 日の距離になり、食も素晴らしい。いいホテルもある。もちろんガーデンもあって農村風景、田園風景も素晴らしい。さらに、パンフレットを見ていただくとわかりますが、タクシープランやホテルプランなども設けています。また、こちらにいらっしゃる十勝バスの野村社長をはじめ、十勝圏二次交通活性化推進協議会と一緒にエリア全体のブランディングをしたことで、今ではもっとも有名な観光雑誌『るるぶ北海道』で、わずか 5 年で北海道の 7 大観光ルートの一つにさせていただけることになりました。

ただ、まだまだ課題はあります。インバウンドが今叫ばれていますが、まだまだ北海道ガーデン街道の集客は少ないのです。そこで、パンフレットは日本語版ですが、裏面には中国語、英語、そしてタイ語も今年から入れました。

5 年間はしっかりと北海道の中でブランド作りをしましたが、これからは 6 年目を迎えますので、海外、そしてインバウンド向けにしっかりと素晴らしいガーデン、風景、食など、いろいろなものを売っていきたいと思っております。

○小磯氏 どうもありがとうございました。林さんが取り組んでおられる十勝千年の森は私も学生を連れて拝見させていただきましたが、その節は大変お世話になりました。ガーデン街道の取組の大きな意味は、点と点だった資源をうまく結びつけたことだと思います。しかも、十勝はこれまで観光という面ではあまり注目されていなかったところだったので、ネットワーク化することによって、大きな魅力ある資源に高めていったことも大きな意味があります。まさに、その仕掛け人が林さんだということだと思います。今後益々のご活躍を期待したいと思います。ご報告ありがとうございました。

それでは、次に網走からお越しいただいた道山さん、ご報告をお願いします。

○道山氏 こんにちは。網走からまいりました、合同会社大地のりんご代表社員の道山と申します。よろしく願いいたします。私はきちんとした資料をご用意していないのです

が、プロフィールも含めてご紹介させていただきたいと思います。

出身は千葉県の九十九里浜で漁師町の出身です。北海道とのご縁は、もう 25 年以上前になるのですが、網走にある東京農業大学の開校時の 1 期生として網走にまいりました。それが縁で、北海道とのつながりができたと思います。当時は 4 年間過ごしましたが、農業も好きで、景観も思っていたものとまったく違って、とても好きなところでした。でも、自分が望む就職場所がなくて、泣く泣く地元に戻りました。地元では百貨店で地域の食材を扱うお仕事や、チーズのバイイング（バイヤー？）のようなことをやらせていただいております。

その後、食品の加工ということで、青年海外協力隊に参加させていただきまして、地域振興というか村おこしのような活動をやらせていただき、その後すぐに結婚してしまいました。北海道からはどんどん遠ざかっていったのですが、今から 12 年前、恩師が農村振興という大げさなのですが、農大を核にして、地域に何か協力できるようなベンチャーを立ち上げたいということで、お声がけをいただきました。当時下の娘が 5 ヶ月ちょっとだったと思うのですが、主人に相談して、何とか北海道に帰りたいということで直談判し、2 年くらい説得して、9 年前に北海道に家族そろって戻ってまいりました。

それがきっかけで北海道での生活が始まったのですが、ベンチャー企業のお仕事をさせていただきながら 3 年過ごした後に、現在の大地のりんごを立ち上げました。

十勝もそうだと思いますが、網走周辺は 1 次産業が大変盛んで、その景観はものすごいスケール感があって、素晴らしいポテンシャルを持っていると思います。でも、観光資源として捉えられていません。首都圏の人間にとっては、網走というと暗い監獄のイメージしかなくて、なかなか観光に来るきっかけや動機付けができるものがないように感じていました。また、物流の面からも、おいしいものがあるのに、なかなか網走のイメージからおいしいものを購入していただくことが難しいように感じていました。そこで、生産地域と物流の消費地域の情報の食い違いを埋めるような役目を、自分が何か果たせないかということで起業いたしました。

会社の名前が大地のりんごというので、「りんご屋さんですか？」と聞かれるのですが、りんご屋ではありません。じゃがいものことをフランス語でポム・ド・テールというのですが、そのポム・ド・テールの直訳が大地のりんごです。要は、飢餓を救った植物だということで、とても敬意を持ってそう呼んでいるのだと思うのですが、北海道というイメージから、すぐ自分たちはおいしいものは「じゃがいも」だと感じるのです。その足元にある素材をもう一度見直して、いろいろな企画提案をできる会社を作ろうという思いでこういう名前にしました。

前置きが長くなってしまったのですが、会社の事業内容としては、まず地元の生産品、農産物の仕入れ販売をやっています。でも一番の主体は、地元素材を使った製造加工業です。

立ち上げのときは、地元でお世話になった農家さんが立ち上げた小さな工場をお借りし

ながら製品を作りました。1年目に企画した郷土料理の漬物が、漬物の大会で日本一をいただきまして、それをきっかけに自社工場を構えました。でも、工場というのも本当にお恥ずかしい、掘っ立て小屋のようなものです。そこで現在パートさんと8名で地域食材を使った加工を行っています。これも販売・企画をやっています。

それからもう一つは、自分が経験してきたものを基にして、コンサルティング的な業務もやっています。地元で起業される方、それから農家さんたちからも原料はあるのだけれどなかなか製品が作れないとか、販売のルートをつかめないと、そういった声があるので、そこを何とか代行できないかなということをやっています。裏の表示をどのように作るのかといった簡単なお話から、販路のご紹介、今は製品の製造代行もやらせていただいております。

今年で6年目になりますが、立ち上げの年から地域の生産者さんたちと有限責任事業組合ということで、25軒の農家さんや漁業者さんたちと立ち上げた組合組織「オホーツクテロワールド」があるのですが、そこの社長もやらせていただいております。この組織ではオホーツク全体の生産地を見ていただいたり、そのイメージを作って製品をどう販売するかなど、そうした勉強会を続けておりまして、現在アンテナショップを2店舗経営しております。ぜひオホーツクにいらっしゃった際にはお立ち寄りいただけたらと思います。以上です。

○小磯氏 どうもありがとうございました。道山さんの取組は、今日初めてお聞きするのですが、生産と流通を結びつけることは、これはなかなかたやすいことではないと思います。それを着々と実現しておられて、しかもコンサルティング業務にも挑戦しておられるということすごいなと思いました。ありがとうございました。

それでは、釧路からおいでいただきました、森崎さんお願いします。

○森崎氏 釧路モカ女性プロジェクトの代表をやっております、森崎と申します。私どもの資料ですが、ピンクの1枚もののペーパーがあると思いますが、大体ここに思いを集約させていただいています。この一番上の釧路モカ女性プロジェクトと書いてあるところの背景は幣舞橋です。釧路の夕日は世界三大夕日といわれるほど夕日が美しく、幣舞橋はその夕日がとても美しく見える場所ですが、それをあえてピンク色に塗り替えてみました。強い女性というイメージで、モカのものは何でもピンク色にしております。そこに「Motto Ookiku Kakkoyoku Aritai」とローマ字で書いてありますが、その頭文字をとってモカという名前をつけました。

私たちの会が立ち上がったのは5年前です。今、熊本の大きな震災がなかなか収束を迎えないために困っておりますが、5年前の2011年3月に東日本大震災がありました。そのときに、何とか自分で自分の命をつないでいこうという女性たちが立ち上がり、そのような会をやっていきたくて思いました。

私は普段、ハローワーク釧路の中で個別のカウンセリングをやっている嘱託職員ですが、その中で、特に女性の方たちとマザーズコーナーというところで多くお話をします。そう

すると、小さな子どもがいるというだけでなかなか採用に至らないなど、そういう悔しい思いを彼女たちと話してきました。だったら、彼女たちと私と、みんなでつながって何かできるのではないかな。そういう思いから、5年前の2011年5月に立ち上げました。

何を始めたかという、まずは自分たちの研修をやろうということで、自分たちが地域のリーダーになっていけるように頑張ろうとやっているうちに、自分たちだけで研修をやるのはもったいない気がして、北海道や釧路市、開発協会などから助成金をいただいて、札幌などからも先生にお越しいたいて講座をやるような形式になりました。

ただ、会場を借りるのには少額でもお金がかかってしまいます。だったら自分たちで稼ぎ出そうと考えました。女性の集まりだから何か物は作れるのですが、どうせ物を作るのであれば釧路らしいものがないなと思いました。

そこで、サンマを取る網を作ってみました。実際に見ていただいた方がわかると思いますが、秋になると、釧路の海の中に実際に入っているサンマの網です。この網を作りたいと思ったのが8、9月くらいで、そのときに網屋さんに行って、ちょっと残り物がないですかと聞いてみたら、あるよあるよ、どんどん持ってけドロボーくらいの感じで、余り物をいただきました。釧路の人はすごく気風がいいので、そのあまりをいただいて、あっちだ、こっちだと作りながらやってみました。

それは、たまたま会場費の何千円かを稼ぎ出したいただけだったのですが、モニターで配るとこれは絶対に品物にした方がいい、商品にした方がいいと言われました。そんなときに釧路公立大学の学生さんが、釧路の土産物のアンケート調査をしたのです。そうしたら、釧路で売っているお魚は別としても、釧路で作っているものって7～10%くらいしかないという結果が出たのです。それに目をつけた女性たちが、これをお風呂屋さんにおいてもらおう、お土産屋さんにおいてもらおう、いろいろな観光地に置いてもらおうということになり、そこに釧路市さんもバックアップしてくれるようになりました。本日は釧路市長もお見えですが、釧路市の応援があって、どんどんこれが広がっているところです。

なぜこれが広がるのかというと、実は中間的就労、いわゆる内職につながっているからです。私たちがもともとやりたいことは人づくりでした。内職というと、昔からお箸を袋に入れて何銭とか、何十銭とか、そんな世界でしたが、私たちは内職に一番お金が回るような仕組みにしています。そうすると、子育て中のお母さんたちでも、家で子どもが寝たときや遊んでいるときに、針も何も使わないので作ることができるのです。今、それを作ってくださっているお母さんたちも20人ほどおられます。

そういう形で、どんどんどんどん広がっていった、今では彼女たちが自分のアイデアで新しい商品を作るという、そんな循環になっています。女性が元気だと、地域が元気になります。地域が元気だと、そこに育った子どもたちが必ず外からグローバルな視点を身につけて、地元に戻ってくるものだと思います。そんな思いで私たち女性たちは頑張っております。そんな団体です。ありがとうございました。

○小磯氏 どうもありがとうございました。私も釧路におりましたので、釧路の女性は、

強いとは申しませんが、大変元気です。私は釧路に 13 年おりましたが、森崎さんの取組は、蝦名市長とも一緒に、いろいろとメッセージを出しながら応援させていただいています。この取組には、地域の資源を有効に使いながら、お金の流れの域内循環という力を強化させていくことの意味合いもあります。

また、釧路市は生活保護という問題に対して、中間就労という形で、自分たちの地域の工夫で働く機会作りをやっているという、全国のモデルになったという伝統もあります。そういう取組と、森崎さんの取組がいろいろな形できっちりとつながりながら進めておられるというところが、モカさんの実践事例の大きな意味ではないかと思います。

さて、各パネラーの皆様から実践事例ということでご報告をいただきました。次に与えられたテーマは、人づくりです。これは、今回の新しい北海道総合開発計画の大きな特徴で、人口減少という時代の中で、国の計画でありながらも人づくりというものに踏み込んだ政策の挑戦をしていこうというのが大きなテーマになっております。そこで、これからの取組のヒントになればということで、実践しておられる皆さん方から、人づくりのあり方、発掘や育成など、何でも結構ですので、ご自身の経験からメッセージをいただければと思います。では、これは逆の順番で、森崎さんからお願いします。

○森崎氏 はい。今もお話をさせていただきましたが、私たちの団体は人づくりから始まっております。人づくりといっても、人に教えるとか、教育するとか、引っ張っていくとか、そういうことではなく、みんなで考えていくということです。女性はなかなか一人では自立できません。経済的にもそうですが、気持ちの上で誰かが寄り添っていたほうが心強いという性質があると考えております。だったらみんなで寄り添っていけばいいんじゃないかということです。単純な発想しか頭の中にはないのですが、そうやっているうちにどんどん輪が広がっていきました。

ちょうど 5 年経ちますが、私は会の中で一番年上で、私がハローワークでお会いする方たちは仕事を探している方たちなので、20 代後半、30 代、40 代の方が多いのです。でも、皆さん何か元気がない。特に 30 代の方たち。自分のことを振り返って昔の写真を見ても、どうも何か子育てに疲れているような写真しか残っていません。その人たちが元気になったら、きっと地域が元気になると思いました。

その人たちといろいろやっているうちに、みんな自立していきます。もともとは、釧路モカ女性プロジェクトというところで活動をしていたのですが、みんな違う人間なので、それぞれやりたいことが違ってきます。だったら自分でやろうよ、でもモカはそこを一緒に応援するからねという姿勢です。そうすると、みんな一人ずつ自立して、力強くやっていけます。そういう活動になっています。

また、市の地域づくりの交付金を利用して、人づくり講座を一般市民向けにやっています。3 カ月の講座ですが、最初の目の輝きと、終盤の目の輝きの違いにはものすごく驚かされます。仲間がいるということが、私たちにとってもうれしいことなのかなということを、教えてくれます。

その人たちが次は講師をするのです。人前でお話をさせていただくということは、話す時間の5倍も10倍も勉強しなければなりません。けれども、そういうことを講師としてやっていることに、何かすごく自信がみなぎってきます。そんな循環の中で活動をしております。

先ほども申し上げた通り、女性が元気になると、家庭の中が元気になります。暗い顔をしていると、ご主人様も帰ってきたくなくなって、夜は明るいところに行った方が楽しいと思いがちです。でも、お家の中でお母さんが元気だと、子どもたちもただ笑っています。そんな笑っている中でお父さんもお母さんも笑っていると、地域も笑ってきます。子どもたちはそんな地域が大好きになります。その地域で成長すると、東京やアメリカやタイ、インドなどに行って、グローバルな視点を身につけても、たぶんきっと必ず帰ってくると信じています。そういうような人づくりをやっていきたいと思っています。

○小磯氏 ありがとうございます。それでは、道山さんお願いします。

○道山氏 森崎さんのお話を聞いていて、主人が帰ってきてくれないということを考えてしまいました。そうですね、女性が元気というか、やりたいことをいろいろとやっている、忙しさはありますが、平和で円満なのかもしれません。

うちも女性ばかりの職場です。人づくりというお話を考えると、どんどん人口減少もありますし、特に私たちの加工業は人材を確保するのがとても難しい状況になっています。特に、若い人たちはなかなか残ってもらえないのが実情です。

現在、私のところでお仕事してくださっている方は60歳以上の方ばかりです。正直、最初の頃は簡素化した仕事、単純作業の繰り返しにすれば根付いてもらえるのかと思っていましたが、実はそうではありませんでした。5年やってきて感じるのは、それぞれ皆さんやりがいとか、自分の特徴を生かすとか、あるいは目的を学ぶとか、そういうことを求めているのかなということです。それは、個人個人で差があるのですが、そういう意味では女性であったとしても、60歳以上の方だったり、お子さんがいらっしゃる方だったり、介護をしていたり、いろいろな病気を持っていたりなど、状況はいろいろあると思うのですが、いろいろな方たちの状況の中でも、人づくりというよりは人材育成みたいなことはできるのかなと思います。

自分も子育てをしながら思ったことなのですが、既存の枠の中でやろうとするととても苦しくて、続けるのが大変だということしか残らないと思います。でも、先ほどお話のあったことと、とても共感するのですが、お互い寄り添ってというか、まあまあ、今日は具合が悪いのだったら病院に行かせなければならないから、いいよ、代わりにやるよとか、どうにか助け合えばやっていけるということもわかってきました。一人の人間が、母親や奥さんなどの役割を担うのではなく、いろいろな側面を社会的に担っていけるような寛容性というか、そのような仕組みができれば、もっと人づくりという意味ではチャンスを作っていけるのではないかと思います。

○小磯氏 どうもありがとうございます。森崎さん、道山さん、お二人のお話には共通

することがありますね。それは、役割分担という言葉はありますが、その一方でお互いにうまく助け合いながら、いろいろな取組ができるのが地方の持ち味であり、地方の良さだということです。そういうものを生かしていけば人づくりにつながっていくのではないかと思います。思いながら聞いておりました。ありがとうございました。

それでは林さん、お願いします。

○林氏 私がガーデン街道を立ち上げた時は 7 ガーデンあったのですが、立ち上げの時に紫竹ガーデンのおばあちゃんも参加しています。7 ガーデンでこれからやっていきたいと思います時、すごくスピードを重要視したいということで、IT を使える人、パソコンを使える人でないと駄目だということで、当時どちらかという引きこもりがちだった孫を出してくれということで、若手でやりたい人、まあ若手と言っても 20 代から 40 代ですが、その世代を中心にやりました。

最初はけっこう喧嘩もしました。特に真鍋庭園の真鍋さんとはすごく喧嘩をしたのですが、ある時気づいたのです。やはり社長さんたちの集まりなので、どうしても喧嘩してしまうのです。自分はリーダーにならないといけないと思っていましたが、喧嘩をしてきづいたのは、喧嘩をしてもあまりいいものは生まれないということです。今ははっきりと言えますが、リーダーシップとマネージャーシップが必要です。リーダーになるべき人がいて、そしてマネジメントをするときには、マネージャーシップというものを持ってやらなければならないのです。この二つを持って運営すればうまくいくはずだということで、それを今実践しています。

特に、女性のお客が多いものですから、例えばプロモーションやデザインなどは、あくまでも裏方に徹する。また、お金の問題や事務的なことは私の方でマネジメントしています。とにかく出るところと出ないところをはっきりさせています。

これは、いろいろなところでも同じだと思っております。やはり役割を明確にしてやることによって、その人の強みを伸ばしてあげることが私は重要だと思っています。

また、インバウンドに関してはこれから取組をしようと思っています。北海道は明治維新後、ホーレス・ケブロンが北海道大学の基礎を築いたり、サッポロビールの基礎も築いています。また、1870 年代には黒田清隆が開拓次官、開拓長官となり、そういった礎を築きました。今、DMO が叫ばれています。DMO というのは Destination Management/Marketing Organization で、まさに来年度以降は DMO に非常にかかわっていくと思うのですが、そういった意味ではマーケティング、そしてマネジメントで、リーダーシップではなくマネージャーシップ、これをできるかどうか、今後の人づくりに重要なのかと思います。

さらに、明治維新を起こした方々は、松下村塾や勝海舟の勝塾などで学んでいますし、また、この地域を開拓した依田勉三さんは三余塾という塾に入っています。そういった意味では、当時の方々はしっかりと書物を読んで、フラットな組織で自由に意見を言い合うということをやってきたというわけです。生産性をもっともっと高める地域、それは組織や自分自身の会社もそうですが、ガーデン街道もそのようにしていきたいと思っております。

す。読書を通じた知識労働者になろうとか、やめることも重要だと、劣後順位をはっきりと決めようと思っています。

観光協会もいろいろなところがあると思うのですが、インバウンドにつながらないことや、外から人が集まらないことも、しがらみでたくさんやっています。そういったこともしっかりとフラットな組織で論議し合うことも重要だと思っています。一方で、パートナーシップをどんどん組んでやることも重要だと思っています。生産性の高い組織、それをしっかりとマネジメントできるような方々を集めることが重要です。そういう方々というのはたくさんいると思うので、私は常にそういう方を、飲みながらピックアップしているという日々を過ごしております。以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。林さんのお話を聞いていると、明治の開拓の思いや精神を感じました。そういう意味では、依田勉三の精神が今につながっているという思いで聞かせていただきました。それでは井田さん、お願いします。

○井田氏 私からは三つお話しさせていただきたいと思っております。一つ目は、人づくりよりも多様な働き方を認める社会です。これは森崎さん、道山さんお二人と非常に似ている意見なのですが、先ほど 30 代に元気がないというお話がありました。弊社は常勤職員全員が 30 代女性ですが、元気がないのは社会の仕組みのせいではないかと思っております。全員非常に能力が高いのです。でも、なかなか今の社会の枠組みの中で活躍しきれないという現状にあります。人をつくるよりも、今いる人たちが十分に活躍できる仕組みをつくれば、十分に素晴らしい人材がまだまだ埋もれていると思っております。

それは、特に女性と高齢者です。弊社は女性が高齢者の能力を生かして、2,000 名の観光ツアーを受け入れております。ですから十分可能性があると考えております。

それから、二つ目。優秀な人材は、うちの弟もそうですが、特に男性のほとんどが東京に出てしまいます。魅力的な仕事がないのだというお話が先ほどありましたが、まさに優秀な人たちはみんな、都会もしくは世界に出てしまうというのが今の北海道の現状ではないでしょうか。人をつくるよりも、その人たちを引き留める、むしろ、北海道が面白いのだと感じてもらえるような場所づくりをすることによって、優秀な人たちが戻ってくるのではないかと考えております。

三つ目は、世界に羽ばたける教育です。残念ながら帯広市の子どもたちを見ておりましても、就学援助を受けている子どもが 4 分の 1 です。私は札幌出身なのですが、見ていると、やはり教育のレベルといいますか、学力レベルの低さがどうしても目についてきます。例えば、先ほど英語が喋れる職員が少ないというお話をしましたが、これだけ多くの北海道に海外の旅行客がきていて、さらに外に売っていくことを進めるにあたって、やはり英語は必要です。もちろん英語よりも先に日本語ではないかというご意見もありますが、国の平均レベルで満足しては、先に行けないと思います。就学援助をもらっている状態では、英語の塾や教室に行くことはできません。

それから、お母さんたちも英語教育をさせよう、食育をさせようという意識が、残念な

が低いのが現状です。保護者に任せていては、子どもたちの学力レベルが上がるわけはないと、残念ながら思っております。もともとは素晴らしい能力を持っている北海道の子どもたちに、ぜひ公教育の充実によって、もっともっと能力を伸ばしてもらいたいと考えております。

子どもたちが外に出るばかりでなく、外にいったん出て、その力を持って、また北海道に帰ってきてくれる、こんな北海道にしていきたいと思います。

同時に、英語ばかりではなく、今ある仕事に満足するのではなく、起業家精神を持った教育も必要です。自分で作り出していく力です。これを持って社会に出ていく、そんな人材を北海道で養成していく必要があるのではないかと考えております。以上の三つです。

○小磯氏 井田さんがお話しされた3点目は、この後世界水準の北海道をどう目指すのかというメッセージですね。この点は新しい計画でも掲げておりますので、その点でもし時間があればご意見いただければと思います。

さて、この第1部、パネリストの皆さんから地域づくり人材の発掘・育成について、大変簡潔にまとまったご発言をいただきましてありがとうございました。パネリストの4名のうち3名が女性ですが、これが一つ象徴的だと思います。しかもその女性の役割や力を今後どう生かしていくかということも、これからの地域にとっては大きな課題ではないかということを改めて感じました。また、その可能性が十分にあるという力強さも感じました。

私から、人づくりというところで1点だけお話をさせていただきたいと思います。

私は今回の新しい総合計画策定では、実際の検討メンバーということで参画をいたしました。戦後8回目の計画ですが、私はそれ以前も行政の立場で総合計画にはかかわっています。先ほども申し上げましたが、北海道の総合計画の伝統は戦前にさかのぼります。振り返ってみると北海道という地域は、近代国家になってからだいたい150年弱です。最初の政策は開拓使です。1872年に「開拓使10年計画」というグランドデザインを策定しており、これが北海道を作った最初のスタートになります。

この開拓使計画の中で盛られた施策は非常に広範です。その中で、実は人づくりの政策というのは、かなり大きなテーマだったのです。それでできたのが、今私が所属している、北海道大学の前身である札幌農学校の存在です。ですから開拓や開発というのは、実は人づくりが原点なのです。北海道大学のミッションというのは、まさに北海道の開拓・開発を担う人材の育成です。そこから新渡戸稲造が出たり、内村鑑三が出たりという歴史があるのです。実は、この思いを、今この時代、今この地域、ひがし北海道に当てはめてみると、どうなのかということです。

象徴的な発言が先ほど道山さんからありました。道山さんは網走の東京農大の1期生で、その思いから今戻ってこられた。そして、自分が過ごした青春時代の故郷である網走、オホーツクで、今活動をしておられるわけです。私も学生ではありませんが、教員として13年ほど釧路公立大学にいました。釧路公立大学はだいたい年間1,300人の18歳から22

歳の若者がおり、それだけ若者が集っているのです。そのほとんどは地域外から来た若者です。人口 17 万人台の釧路市において、1,300 人の若者が常に集うことができる仕掛けとして、装置として大学の存在は貴重で、まさに地域のこれからの活性化にとっても大変大事だと思います。

今、日本の政策テーマの一つが地方創生といわれていますが、人口減少の最大の問題は、多くの若者が一番出生率の低い首都圏・東京に集まって、負のスパイラルが起きていることです。これを解消するために、若者を地域にいかに集めてくるかという取組が、改めて大事ではないかと私は思っています。新しい北海道総合開発計画の議論の中で、私はそういう発言をさせていただきました。

例えば、今、日本の大学生の 25%が、人口比 10%の東京にいます。この構造はどう見てもおかしいと思います。そこに北海道の役割があります。このひがし北海道に、釧路公立大学のような大学があと三つか五つできれば、いいわけです。今では自前で大学が作れる時代ですから、ぜひご当地でも検討してみたいはいかがでしょうか。これから人口減少で、大学に入ってくる人が少ないからもう駄目だという発想ではなく、東京にいる多くの若者をこのひがし北海道に持ってくる、そういう思いでこれから取り組んでほしいと思います。最後にちょっとそんな思いを申し上げさせていただきました。

パネラーの皆さんのご協力で第 1 部は無事に進行を終えることができました。この後、第 2 部に移ります。学校でいうと席替えになります。座席の入れ替えをさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

○小磯氏 さて、準備はよろしいでしょうか。それでは、時間の関係もございますので、これから第 2 部のパネルディスカッションに入りたいと思います。

第 2 部のテーマは「世界のひがし北海道 2050」という大変長期で先を目指すテーマです。今回の新しい総合計画の中は 2050 年を見据えてということになっており、それが新しい計画づくりの一つの前提になっています。そこで、それを踏まえながら、前段で、このひがし北海道地域における、連携と対流の現状と課題を考えていきたいと思っております。第 2 部のパネラーは行政のリーダーの皆さんもおられますので、そういう視点からのお話をいただけたらと思います。また、後段では、世界水準の食と観光をどう目指していこうかという視点でお話を進めていきたいと思っております。そのような流れで第 2 部を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは早速ですが、連携と対流の現状と課題ということで、各パネリストの皆さんから 5 分程度、それぞれご報告をお願いしたいと思います。最初に釧路市の蝦名市長からお願いします。

○蝦名氏 よろしく申し上げます。釧路市の蝦名でございます。連携と対流の課題ということですが、まずこれは新しい北海道総合開発計画に向けてのテーマだと思っています。今日、釧路を出てきて帯広までまいりましたが、高速道路がつながって本当に良かったと思いました。ありがとうございます。

こうやって道路がつながると、いろいろなところと連携しやすくなります。私は釧路生まれで釧路育ちですが、生まれて初めてきちんと帯広に来たのは30歳くらいになってからです。実は、それまでは全然来たことがありませんでした。北海道は非常に大きく、そして北海道内のアクセスがきわめて厳しいという状況の中で、どちらかというと東京に行った方が近かったという感じがします。初めて東京に行ったときは、釧路空港を出て、帯広空港で乗り継ぎがあって、そして東京に行ったと思います。

今までの経験から考えると、交通インフラはいろいろなものの需要を作り上げていくと感じます。需要があるところにインフラができると言われておりますが、逆だと思っています。インフラができることによって、様々な需要が創出されます。今は、釧路の子どもたちも高速道路ができたので、帯広に行こうなど、どこかへ行こうという話が出てくるようになったと思います。そのようなことが極めて重要だと考えているところです。

新しい北海道総合開発計画に向けたスタートといえるのが、これからお見えになる、太田前国土交通大臣の時代に検討が進められた「国土のグランドデザイン 2050」ではないかと思っています。その中でコンパクト・プラス・ネットワークというキーワードがありますが、私はこの言葉を聞いたときに大変うれしかったわけでございます。今、釧路の人口は17万5千人くらいでございます。まちづくりとしては、22万人のときに25万人の街を目指すということで街を拡大していきましたが、その結果17万5千人ということでございますから、当然、空いてしまうことになってしまうわけでございます。

そこで、これをどうするかということで、釧路市のコンパクトシティの考え方をまとめました。それは釧路市内の中に八つの拠点を作って、そこをバスなどの公共交通などで、ネットワークを結んでいこうという考え方だったわけでございます。その拠点にどのようなキーワードがあるかということ、暮らし、生活ということです。

例えば、暮らしていくためには毎日食料品を購入しなくてはいけないとか、医療関係が必要であるとか、公的な施設があるとか、そういったことを一つ拠点化する。釧路市内で25万人を目指した面積のところに17万5千人なので、拠点を作りながら進めていこうという形をとりました。

そうやって考えていきますと、新しい総合計画や、このコンパクト・プラス・ネットワークは、まさに地方の中で進めているまちづくりとマッチしてくると思っております。併せて、そこで重視したのが生活ということで、生活様式の基本ベースでもあります。昔から言われている言葉に衣食住がありますが、着るものと食べるものと住むところで、その中でちょっと言葉を変えて、「い」は「い」なのですが、メディカルでお医者さん、医療の「医」とする。そして食とそして住。そこに安全安心なという言葉の一つ加えて、安全安心な「医療」、安全安心な「食料」、そして安全安心な「居住空間」、これは地域ということではありますが、それらがすべてのベースになっているだろうから、ここをしっかりと進めていこうと、そんなお話をしながら、いろいろな計画を進めているところであります。

北海道は昔から広域分散といわれています。今人口減少になって、東京などは別でしよ

うが、様々な地域でいろいろなところが空いてきて、広域分散しなければいけない状況になってきました。でも、北海道は昔から広域分散には慣れておりますから、私たちの取組の方が、間違いなく全国に先駆的にいろいろなことができると考えているところでございます。まずは、それをしっかり進めていくことが重要だと思っております。

新しい計画の中のキーワードで、私が最も注目しているのは、「生産空間」です。うちのまちも 62 年前に市民憲章を作っており、その前文に、釧路ですから「広野に丹頂が舞い」、というところから始まります。その中間に「生産都市を誇りとして」という文章が入っておりまして、ここが私は非常に好きなのです。私が子どもの頃には水産の街・釧路でした。魚のにおいが嫌だというようなことは言いましたが、62 年前にこの地域を開発した人たちが、「生産都市を誇りとして」ということを書き込んだ、その気概というものを、今こそ、持つべきだろうと思っています。そんな思いから、新しい計画の中に「生産空間」という言葉が入っていたことは、大変うれしく思っているわけであります。

そういう意味で、私たちが北海道の中で、それぞれの強みを生かしながら進めていくこと、強いところを伸ばしていくことが重要だと思っています。釧路は水産があります。また、帯広は農業生産額が 3,500 億円もあります。網走ともいろいろなことを連携しています。例えば、空港についても、釧路、そして今日ご出席の水谷網走市長、そして帯広の米沢市長と定期的にいろいろな相談をしながら進めていますが、今こそ広域分散型に慣れている北海道の中で、そして、このひがし北海道の中で、地域が連携してそれぞれのところの強みを生かす。そして生活に必要なところをしっかりと充実することによって、いろいろな展開ができるものと考えているところであります。以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。私も釧路市の政策のお手伝いはいろいろさせていただいております。新しい北海道総合開発計画の内容と釧路の取組を少しリンクさせてみると、一つはコンパクトということがいえます。人口減少時代における住まい方のありようや人と地域のかかわりようという面でいくと、北海道はもともと広域分散です。しかし、広域分散なのですが、働く場所と住む場所が近接しています。これは本州の広域分散型と決定的に違う点です。ある意味で人口減少時代を先取りしているのが、実は北海道なのです。そういう意味で生産空間というものを、しっかり日本のこれからの地域づくりのメッセージとして出していく。そして、実はそのフィールドがこのひがし北海道だという視点で、ぜひこれから取り組んでいければ、と思っていました。ですから、今のお話は力強くお聞きしていました。ありがとうございます。

それでは、地元・帯広市の田中さんよろしくお願いします。

○田中敬二氏 帯広市副市長の田中です。米沢市長が帯広を離れておりまして、普段見かけないごつい男が出てまいりましたが、よろしくお願いしますと思います。私からは十勝の現状と課題についてお話をさせていただきます。帯広を含む十勝の観光客は、平成 26 年度で 993 万人となりました。平成 23 年度に道東道が道央圏とつながったことで、交通アクセスが非常に良くなり、また先ほど林さんがお話しされていましたが、北海道ガーデン街

道などで、富良野からのお客様も多くなったということで、平成 26 年度の数値は道東道開通前から 100 万人以上増えています。そんな数字になっています。

先ほど釧路市長からもお話がありましたが、3 月に十勝と釧路の間は非常に移動時間が短くなりました。これがさらにオホーツク圏につながる、そしてひがし北海道全体がつながることで、人と物の交流がさらに盛んになることを期待しております。

課題を挙げさせていただくとすれば、十勝の場合はまだまだつながることだと思っています。道東道にしてみれば、足寄と陸別の間がまだ事業再開になっていませんから、これが大きな課題だと思っていますし、十勝港までの整備区間はありますが、残念ながら帯広－広尾自動車道がまだです。もう、ほんの少しなのですが…。今日は太田前大臣がお見えになるということで、お礼を申し上げなければいけないと思っておりました。それは平成 26 年に南十勝の要望を、当時の太田大臣に受けていただいて計画が非常に前進したことです。それと、凍結区間であった陸別－小利別間の凍結を解除いただいたのも太田大臣時代のことであります。

こういったところで大変お世話になっているわけですが、先ほどもいいましたように、十勝港まであと一押しでつながります。できれば、その力添えを太田前大臣をお願いしたかったわけですが、また別の機会とさせていただきます。

十勝の平成 26 年度の外国人宿泊の延べ人数は、約 13 万人です。前年度比で 16%伸びています。しかし、道内の構成比でみると、たったの 2.7%しかありません。これをひがし北海道に置き換えても 7.3%です。北海道に外国人のお客様は見えているのですが、日高山脈を越えていないという現状があります。

ただ、一方で台湾のお客様などはリピーターが非常に多く、札幌はもうピークを過ぎているのではないかという見方もあるようですから、見方を変えて、このひがし北海道にはまだまだ延びしろがあるという捉え方でいきたいと思っています。

広域観光周遊ルートの形成事業によって、新たなメインルートが形成されることになります。5 年間にわたって、外国人観光客の受入環境整備の取組が進みますし、海外に向けた共同プロモーションが展開されることで、ひがし北海道全体の受入体制のレベルアップにつながるものと考えております。

十勝においても、後ほど野村さんからお話があるかもしれませんが、都市間バスなどの二次交通の wifi 整備が進むなど、環境が整備されることで今後もひがし北海道全体の取組が進められるように協力していきたいと考えております。

次はひがし北海道の空港の連携についてであります。先ほど、蝦名市長からもお話がありましたが、昨年、釧路、網走、帯広で連携事業を実施しています。国の地方創生交付金を得ながら、国際チャーター便の誘致に向けた取組を実施しております。そんな中では帯広空港は、年間約 60 万人の利用があります。十勝の空の玄関口なのですが、市の管理空港でありますので、非常に財政規模が小さい空港であります。しかし、一方で新千歳空港からのアクセスも良いですし、全国有数の晴天日数を誇ります。就航率も 99%と非

常に高い。これは強みだと思っております。そういう観点から、今後一層、ひがし北海道の中でも重要な役割を果たす空港だと、私どもも自負しております。

そういった背景で、帯広では今年、受入体制の強化を図るためにターミナルビルの増築と、国の支援をいただきましてエプロンの拡充の実施計画を進めております。平成 29 年度に供用開始予定であります。現在のとかち空港は 1 日 7 便の東京便、そして 8 月には名古屋便が就航しますから 8 便が行き来しております。このため、チャーターの誘致をしてリクエストもいただくのですが、時間が合わなくてお断りをするケースが増えています。搭乗口が二つしかなかったのですが、29 年度からは三つになりますし、エプロンも拡張しますので、そういったことも解消されて、国内外からひがし北海道に来ていただく方の玄関口の一つとして、十分に一翼を担っていけるものと考えております。以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。今、田中副市長がおっしゃられた中で空港の問題がこれから非常に大事なテーマになってくると思います。ただ、私も釧路にいましたけれども、このひがし北海道地域は空港間の横の連携というのが比較的早く進んでいます。それが今、北海道全体の民営化という大きな流れの中でみると、実はひがし北海道の地域の横の連携が、あの動きの素地の一つになっているのではないかと感じております。そんな思いを抱きながらお聞きしておりました。ありがとうございます。

それでは、第 2 部のパネラーでは唯一の女性ということになりますけれども、田中夕貴さん、よろしくお願いします。

○田中夕貴氏 北海道の地域とみちをつなぐネットワーク連携会議の代表をしております、田中夕貴と申します。この団体は、北海道の高速交通インフラの整備促進を目的として、全道各地の 12 の住民団体が集結し、お配りいたしましたような漫画を使った情報発信などで、啓発活動などを行っている団体です。

私自身はオホーツク海のほぼ中央に位置する紋別市を中心に活動しております、オホーツクのみちと未来を考える会という団体を立ち上げ、参加しております。

今日のテーマのひがし北海道は、範囲がとても広くて、私の街・紋別市は帯広からだとは 241km あり、車で 4 時間以上かかります。紋別には鉄道ありませんし、都市間を結ぶバスもありませんので、交通手段は車しかありません。帯広市からだとは足寄町まで 51km 区間は高速道路の道東道がありますが、足寄から先は北見、そして紋別まで 180km、ひたすら一般道を走ります。これがもし北見まで道東道が延びて、北見から遠軽が地域高規格道路、そして旭川ー紋別間を結ぶ高規格道路も完成していたら、帯広と紋別はすべて高速道路でつながることになります。今に比べてどれほど距離感が縮まり、安全に、安心して行き来ができることでしょう。私たちは十勝とオホーツクを結ぶ、高速道路の完成を待ちわびています。今は、お隣の地域でありながら、東京へ行くよりも遠いのが現実です。

なぜ十勝と釧路、オホーツクが結ばれないかにはたくさん理由があると思いますが、私からは生活者の視点でお話をしたいと思います。

私たち、地方の暮らしは様々な面で生活圏が広域になっております。特に今、地方での

医師数は年々減少して深刻なテーマとなってきており、私たちにとって一番不安なのは急速に進む医療格差の問題です。私たちは救急医療や高度医療を受けるため、また、出産や通院のために長距離の移動を強いられています。

お配りいただきました、こちらの北海道地図の資料をご覧くださいと思います。これは、北海道内で分娩のできる地域を白、条件付きで一部の分娩が扱われているところを薄いピンク、分娩ができない地域を濃いピンクで分けております。見ていただくと、北海道内で分娩できる地域がいかに少なく、多くの妊婦さんが長距離の通院や分娩をしている現状がお分かりいただけると思います。

私自身も紋別市から 60km 離れた遠軽町へ通い、出産した経験がありますので、妊婦さんにとって、その負担が精神的にも肉体的にもとても大きいことを実感しております。去年の秋からは遠軽町でも分娩ができなくなりましたので、紋別の妊婦さんはさらに遠い北見市へ 100km の距離を通い、出産しております。

「保育園落ちた、日本死ね」といった書き込みが問題になりましたが、私は日本に生まれたことをとても感謝しておりますので、「日本死ね」とは言いません。でも、待機児童問題と同じように、少子化問題の解決のためにも子どもを望むすべての女性が安心して子どもを産み、育てることができる日本であってほしいと心から願っております。

医療の問題は出産だけに限りません。行政区域を超えた広域での医療連携と、地域間をつなぐ安全な高速交通ネットワークが強化され、地方でも安心して暮らせることが地方の産業を支え、地方を元気にする上で一番重要なことだと思います。以上です。

○小磯氏 どうもありがとうございました。私は田中夕貴さんとは、紋別で一緒に活動しております。今ご紹介のあった資料 4-1 の地図はショッキングな情報だと思います。ピンクの地域がほとんどで分娩できないという状況にあります。逆にいうと、やはり高速道路を含めた交通基盤整備の必要性が如実にメッセージとして伝わってくる図面だと思います。改めてお話を聞いていました。ありがとうございました。

さて、太田前大臣が今ご到着になりました。大変お忙しいところを、到着後すぐで申し訳ないのですが、ぜひコメンテーターとして、こちらにご登壇をお願いします。

今、第 2 部のパネルディスカッションの途中なのですが、せっかくお見えになりましたので、一つ、新しい総合計画の策定責任者ということで、ご挨拶を一言いただいた後、このパネルディスカッションを引き続き始めたいと思います。まずご挨拶をお願いいたします。

○太田氏 皆様には大変ご多忙の中、ご出席をいただき、また今日は国土交通省と地元の主催ということで参加をさせていただいて大変光栄に思っております。日本の地方創生、そして日本全体の経済を上向かせる、こうしたことが安倍内閣の最大の課題であるのですが、その原動力になっていただかなくてはならないのが東京であり、そして関西であり、そして沖縄であり、なかんずく北海道であると、このように思っております。

そういう意味で北海道がどういうふうこれから発展をしていくのか。例えばインフラ

ということを考えても、いろいろな形で連携をとっていただく。道路網ということが、物流においても、人流においても、観光においても大事だということで、大変ご努力をいただいております。そこをよりバックアップするということが大事だと思っておりました。しかし、なかなか道路自体についても、北海道の道路は車や人以上に、動物の方が横切っているなどという、あらぬ批判があったりしました。国政としては十分ご期待に応えられないという状況が続いていたと思います。

国土をどう発展させるか。首都ということではなく、38 万平方 km それぞれの大きさを持って日本を発展させるということが、なにかずく北海道において、その原動力になってもらうのが大事だということで、国土のグランドデザインを一昨年 7 月 4 日に出させていただきました。それに基づいて、この 3 月に新たな北海道総合開発計画が閣議決定となりました。それまでずっと、今日、壇上にいらっしゃる方々、また北海道局長さんをはじめとして、多くの皆さまが時間をかけて練り上げて、開発計画を出していただき、いよいよここからスタートを切って、どう実行するかという段階になりました。プランがいくら出されても、現実が一番大事なのは、地元で担う人が本当に困っているところをバックアップして、ネックがあったらそれを打開するということです。そんな往復作業がいよいよ始まったということだと思います。

国が言いつばなしだったり、あるいは計画を上からどんと出すのではなく、担う人が受けて、そして受けて働く中で、いろいろなボトルネックを、往復作業をしながら打開していく。産業の、あるいは人流の、物流の、観光の大きなポテンシャルを持っている北海道が、日本の牽引力としてさらに発展をする。また、北海道は日本の北海道という以上に、世界の北海道という、世界の中での位置づけをしていく。今も農協の組合長の有塚さんにお会いしてきたわけですが、例えば、この地域の長芋は国内でも品質が高く、輸出も順調で、6 次産業という面からも大きく結束して、農協だけでなく地元全体の大きな発展の源として頑張っています。あるいはそれぞれのレストランやいろいろな組織と連携をとることもやっています。今日はその例の一つとして北海道ガーデン街道の林さんもいらしています。まさに、そういうことを皆様に、今日の会合のようにやっていただく中で、問題点が出たら、直ちに私や岡部局長に言っていただく。皆様が頑張っていく中で、本当に世界の北海道となるということについて、大きく連携をとりながら頑張っていきたいと、このように思っている次第でございます。

今日のシンポジウムを実りのあるものにすると同時に、今日、ご提案いただいたことを受けて、直ちに私と岡部さんとともに実行するということをお約束申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

○小磯氏 太田前大臣、力強いご挨拶をいただき、ありがとうございました。既にこのパネルディスカッションは第 1 部を終わっておりますので、前大臣、第 2 部の途中ということで、この後の議論を引き続き進めます。皆さま方のお話をお聞きになられて、後でコメントをいただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

それでは第2部のパネルの方に戻ります。「世界のひがし北海道 2050」という、かなり長期的な視野の中で、当面ひがし北海道の連携ということで、議論を進めておりました。お待ちしております。野村さん、ぜひ十勝での取組、ご当地の報告ということでお願いいたします。

○野村氏 ただいまご紹介いただきました、十勝バス株式会社代表取締役社長を務めさせていただいております、野村でございます。私はバス会社の立場から、いわゆるハードを活用する側から、もっとという活用をもっと増して行って、ますます道路の整備が必要だということをお伝えしていきたいと思っております。お手元の資料 5 をご覧いただきたいと思います。

まずは、ひがし北海道の高速交通体系のネットワーク化の現状を図で示しております。もちろん、さらにますます整備を進めていかなければならないと思うのですが、冒頭でお話しましたように、この整備をどんどん進めていくためには活用もどんどんしていかなければなりません。ハードだけでなく、ソフトもしっかり進めていかなければならないと思っております。

そんな中で、私は、公共交通というのは、実はよくお客様に見えていないのではないかと、もっと見える化を進めなければならないのではないかと考えています。それともう1点は、現在、路線バスというのは生活交通の一面だけを捉えておりますが、これから団体旅行から個人旅行にシフトしていく中で、生活交通も観光交通を担うべきではないかと思っています。観光交通を担うことによって、生活交通の裏支えをするべきではないかということです。従いまして、公共交通のアナログ的な見える化、あるいは商品化が絶対に必要ではないかと考えております。

資料の次のページの上段をご覧ください。この十勝では、他のバス会社さんや十勝管内のタクシー会社全社と連携をとって協議会を立ち上げ、二次交通全体のアナログ的な見える化を実現させました。これは、お客様から見ると、この地域が行きたいところにはいつでも誰でも簡単に行けるということを示していくことで、たくさんのお客様に十勝に来ていただきたいという思いで作上げたものです。

資料の下段をご覧ください。今までの話はアナログであります。これからの時代はやはり IT をしっかりと活用していかなければなりません。そういう意味で、デジタルの IT による見える化を進めていくことが必要です。そこで、北海道大学さんと IT 開発会社さんと一緒に、バスの強みを発揮するために、乗り換えアプリとバスロケーションを組み合わせたアプリ、ソフトを作り上げまして、今展開しているところでございます。

次のページをご覧ください。そんな中で、観光庁さんから、ひがし北海道広域観光周遊ルートをご指定いただきました。これを有機的に機能させるために、ひがし北海道にいる交通事業者である路線バス事業者、観光バス事業者、タクシー事業者と言われている二次交通がしっかり連携をして、十勝で取り組んだようにまず見える化していかなければいけないのではないかと考えています。

さらには、農水省さんによって間もなく事業化される食と農の景勝地についても、ぜひともこの十勝で受託をしまして、ひがし北海道の事業に重ね合わせて、この十勝をさらに輝かせていきたいと、そのように考えているところでございます。

資料の下段にいきますが、今まで二次交通のお話をさせていただきました。しかしながら、この二次交通がしっかりと機能するためには、やはり一次交通との連携が必要であろうと思います。北海道観光において、今まで一次交通の皆さんは大変頑張ってきていただいていた。しかし、残念ながら我々二次交通側の努力不足もあり、一次交通の皆さんとの連携がまだまだ成し得ておりませんでした。そこで、本州、あるいは海外からのお客様を呼び込むためには、一次交通と二次交通との連携が必要だと考えております。

次は 4 ページ目の上段になります。これからのインバウンド向けの観光振興における根底に潜む重要な課題だと私が思っていることについて、ちょっと述べさせていただきたいと思います。

インバウンドは近々、団体旅行から個人旅行に必ず移行していくだろうと思います。しかしながら、インバウンドでは国際免許取得に制限のかかっている国もあります。また、暖かい地域のインバウンドのお客様は、冬の雪を見たいということで、本当にドライブ観光だけで推し進めていいものだろうかということも考えられております。つまり、ひがし北海道に呼び込んでも、個人旅行化したお客様や、冬の観光を大きく売っていく中でのインバウンドのお客様が、自由に移動できないのではまずいのではないかと考えております。したがって、先ほどから申し上げております二次交通、ひがし北海道レベルでの連携、あるいはさらに拡大した北海道レベルでの連携も必要だと思います。そして、一次交通、二次交通相互の連携が必要になっていくのではないかと考えております。

もちろん、日本におきましても大都市圏、東京、大阪、名古屋等は、既に車を持たない世代から、免許を持たない世代も徐々に増えてきています。ドライブ観光と、二次交通・一次交通の連携した公共交通観光、これもしっかりと推し進めていかなければならないのではないかと考えているところでございます。

資料の下段になりますが、つまりインバウンド対策としては、一次交通同士・二次交通同士の連携、あるいは一次交通と二次交通の連携により、アナログによる見える化、IT による見える化が必要です。そして、やはり海外の方たちは、ふんだんにネットを活用しますので、wifi の設置というものがこれからは大きな課題になっていくのであらうと考えております。簡単ですが、以上でございます。

○小磯氏 野村さん、ありがとうございました。この地元では十勝バスは大変有名で、「かちバスさん」という愛称で呼ばれています。実は私も十勝バスにおじゃまさせていただいて、職員の皆さんと意見交換させていただきました。

先ほど見える化というお話がありました。いわゆる乗り手にとってのバスとはいったい何だろうかという原点から取り組まれたということで、実は十勝バスさんの取組はミュージカルにもなっています。これからの公共交通のバスのあり方を全国的に革新的に変えて

いく、大きなきっかけになった取組だと私は思っております。やる気になったらバスも魅力のある乗り物になります。要は、そのように意識を変えていった、素晴らしい取組をされているのが十勝バスだと思います。この後、食と観光ということで、観光の面についてもまた後ほどご意見をいただければと思います。

それではお待たせいたしました。水谷網走市長、よろしくお願いいたします。

○水谷氏 ご紹介いただきました、網走市長の水谷です。まちの紹介、課題、連携、そしてその課題というようなお題でございましたので、今年に入って網走市が取り組んできたことや課題などをお知らせしながら、連携のお話、そしてその課題について 5 分の中でお話をしたいと思います。

1 月に私たちは東京オリンピック、パラリンピックのホストタウンというものに一次登録をされたところであります。このホストタウンというのは全国 44 カ所で登録をされたわけですが、その中の一つに網走市が登録になったわけであります。何の登録になったかと申しますと、オーストラリアのパラリンピックのレーサーで、車いすマラソンの選手の合宿と、選手の誘致です。もう一つはオリンピックの 7 人制ラグビーのオーストラリア選手の合宿の誘致と交流で、そのホストタウンに登録して、そうした選手たちと今後のオリンピックまでにやっていこう、4 年間やっていこうということに登録されたところであります。

3 月には、パラリンピックのナショナルトレーニングセンターとして、網走市は全国 6 カ所のうちの一つにその拠点に選ばれました。これは、バイアスロンの会場があり、当市は公道でスキーを走って、自衛隊ではないところで実弾が撃てるという場所があるので、そうした練習環境が評価されて、パラリンピックのナショナルトレーニングセンターの全国 6 カ所のうちの拠点の一つとなったわけです。

また、昨年 9 月 27 日、第 1 回目のオホーツク網走マラソン大会を約 2,500 人規模の小さな大会ではありましたが、開催をいたしました。全国では 3,000 近くのマラソン大会があります。東京マラソン、大阪マラソン、名古屋マラソン、福岡国際マラソンなどいろいろなマラソン大会があります。ハーフマラソン大会もありますから、全国でマラソン大会と称するものが約 3,000 近くあるのですが、第 1 回目のオホーツク網走マラソン大会は 3 月 22 日に開催され、これが「全国ランニング大会百撰」に選ばれました。この評価はコースがいいということ。食がいいということ。そして、もてなしがよかったということ。この三つが評価されて、第 1 回のオホーツク網走マラソンは全国の百選に選ばれたところであります。

また、日本体育大学が日本で初めて障がい者スポーツを専門とする高校を網走市で来年開校いたしますが、その認可申請を 4 月 3 日にしたところであります。6 月には私学審議会を通して設置の許可がされるものと思っております。日本で最初の、障がい者スポーツを専門とする高校ができますので、将来はパラリンピアン、スペシャルオリンピックに出るオリンピックがこの網走から出るのではないかと、私も楽しみにしているところであります。

一連の流れから申しますと、障がい者スポーツを一つの大きな切り口として、網走市はこれからのまちづくりをやっていこうとこういうことを言っております。

考えてみれば、来年、冬季アジア大会が帯広や札幌で開催されます。2018 年には平昌の冬季オリンピック、2019 年はラグビーワールドカップ、2020 年は東京オリンピック。2022 年は北京の冬季オリンピック、そして、2026 年は札幌冬季オリンピックかもしれない、あるいは 30 年になるかわかりませんが、とにかく今までの世紀の中で、これほどスポーツに焦点が当たる時代はなかっただろうと思います。

これから 4 年間から 6 年間、もしかしたら 10 年間は、我が国はスポーツというものに対して、特に光を当てていく世紀で、本当に輝かしい時代がこの 10 年間は訪れるだろうと思います。そして、その中で私たちは障がい者スポーツということを切り口に、これからの高齢化社会に向けてのまちづくりをしっかりやっていこうではないかと考えています。

考えてみれば、私は今 53 歳ですが、30 年後には車いすが必要になる人生を歩むかもしれません。あるいは知的障害のような、なかなか判断ができにくいということに、私が 30 年後になるかもしれない。実は、障がい者スポーツをやっている方々は、私たちの 30 年後、20 年後の元気な姿を現しているのかもしれないと想像できるわけです。

だから、高齢化社会に向かったこれからのまちづくりというものを、障がい者スポーツという切り口でやっていくことが、高齢化社会に向けた、そして人口減少社会に向けた我々の地域のあり方ではないだろうかと考えています。そんなことで、障がい者スポーツということを切り口に、今まちづくりをやっているところであります。

そこで課題であります。例えば、大変ラグビーがブームになりました。今年もラグビーフェスティバルが 7 月下旬に行われ、6 試合行われると思います。東京の昔の国立競技場や秩父宮ラグビー場で行われ、いわゆるプラチナチケットなども出るでしょう。決勝戦のような試合が、網走のスポーツトレーニングフィールドで、目の前 3 メートルのところで、肉弾戦が行われるのを見ることができるとなればどうでしょう。そういった様々なスポーツを見ることができるとなれば、特にラグビーはこれだけ盛り上がっておりますから、多分おっかけの方も相当いるのだらうと思っております。しかし、そこで大変ネックになるのが、交通ネットワークになるということです。

今、空港の問題はいろいろあります。そんな中で帯広、釧路、網走と 3 空港連携で様々な取組をおこなっているところではありますが、例えば新千歳に入って女満別に来るということは、北海道に 2 回来るといようにお考えいただいて結構かと思います。要するに、札幌と東京の飛行機の値段も、千歳から女満別に来る値段も一緒なのです。同じような値段なのです。要するに、北海道に 2 回来る値段で、うちの地域に来ることになってしまうのです。これでは、なかなか網走に来ることができないだろうと思います。だから、今空港の民営化や連携などの形で一体となった空港の運営、ネットワークのあり方というものを考えないといけないわけです。一極集中であったり、そうした様々な取組というものに対して、ボトルネックになっているのは、そういう問題ではないかと思います。そして、

道路もつながっておりませんので地方に来にくいということもあります。

これからスポーツの世紀があり、高齢化社会に向けていったときに、どういうまちづくりをしていくのか。その中で、アクセスの良さというものが非常にまちの活性化につながってくると思っております。これからの課題は、まさにネットワーク、そして需要と供給における値段の問題もあります。価格という問題が非常に大きくなってくるのだろうと思っております。

今大変話題になっております、空港の民営化については、釧路は国管理、帯広は市管理、そして女満別は道管理となっております。だからといって、それぞれ管理が違うから、これは入れてやるというような議論ではなく、全体として最適なあり方としてどうなのかという視点から、空港民営化の考え方に取り組むべきだと思っております。以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。障がい者スポーツという切り口での新しい動きに対して、大変これからの可能性を感じました。また、やはり高齢化時代の中での取組というものが生きてくるのだということを感じながら聞かせていただきました。ありがとうございます。

第 2 部の一巡目は、ひがし北海道という地域相互の連携・交流という中で何を目指していけばいいのかについて、一通りお話をいただきました。私自身も釧路に長く活動しておりましたので、十勝やオホーツクともいろいろなかわりがありました。このひがし北海道地域には、開発局の支分部局として開発建設部が三つあります。ご当地の帯広開発建設部、釧路開発建設部、それから網走開発建設部です。実はこの開発建設部がひがし北海道で一緒になって、ひがし北海道全体の議論をしていこうということで、2014 年から連携の取組が進んでおります。最初の年は観光をテーマにしましたが、これは野村さん、水谷市長もご参加いただいて議論しました。それから 2 回目は物流でした。これはなかなか難しいテーマなのですが、今年 3 月にはこの帯広で、防災、それから強靱化というテーマで議論しました。3 カ年、それぞれ持ち回りでということだったのですが、今お話をお聞きしますと、さらに新たなテーマといたしますか、いろいろな視点で横の連携を進めていくことが、この地域にとって必要なのではないかと思います。ですから引き続きそういう取組も開発行政として進めていっていただきたいという思いを持ちながら聞かせていただきました。

さて、第 2 部の第 2 巡目は、世界水準の食と観光をどういう形で目指していけばいいのかです。これは、この地域のみならず、北海道にとって非常に大事なテーマです。ただ、やはり先ほどから議論に出ていますように、この地域の持っている、特に生産地としての魅力をどういう形で観光というものに結び付けていけばいいのか。そこを少し議論として深めていきたいと思えます。これにつきましては、順序を逆にして、今ご発言をいただきました、水谷市長からお願いいたします。

○水谷氏 世界水準の食と観光というテーマですが、いわれるまでもなく、当市、そしてこの地域における食は世界水準で、安心、安全であり、おいしいということが世界水準の食を提供していると思っております。特に農産物、海産物については世界標準だと思って

おります。中でもホタテ。当市のホタテの生産量の多分 7 割近くは輸出をしているという状況で、それはやはりおいしいから輸出ができています。そして太田前大臣からもお話がありましたが、当市も去年はカナダのバンクーバーに、そして一昨年はロサンゼルスに長芋を輸出している実績を持っています。だいたい今 1 億円程度、まだ 1 億円しか売っていないのですが、地方総合戦略の中で、当市はそれを 5 億円にしていこうということで、今後は様々な食を売っていこうと思っております。

ただ、いかんせん、食については 1 次産品はあるのですが、加工品がないというところが私たちの大きな悩みであります。おいしい食材はあるのですが、おいしい料理はあるのかといったところが一番の課題であります。料理のあるところに必ずお客様が来る、おいしいもののあるところには観光客は来るのだらうと思っておりますので、今、私たちの取組の中は、いかにしておいしいものをおいしく食べていただけるかということが大きな課題なのだと思います。

そして、食は大きな観光資源でありますし、また食以外にも道東にはミシュランの三つ星、グリーンガイドジャポンで三つ星が三つもある、日本でもまれな地域であります。一つは知床、摩周、もう一つは阿寒湖です。この三つ星の綺羅星のごとく並んでいる道東がまだまだ魅力を高めるには、先ほどの一つ目のお題にあったように、ネットワークが重要です。いかにしてこれをつなげていくのか。二次交通であったり、道路の整備であったり、また空港間の連携であったりというものが、一番の課題であると思っております。まさに食と景観がこの地域の売りで、これを売っていくことがこの地域の大きな強みなのだろうと思っております。

○小磯氏 ありがとうございます。それでは野村さん、お願いします。

○野村氏 私は、やはりこのひがし北海道に我々自身がもっと自信を持つべきなのではないかと感じています。北海道・・・、北海道らしい北海道、リアルな北海道、私はひがし北海道が、食も大自然もある、リアルな北海道なのではないかと思っています。今、北海道に観光にいらっしゃるお客様はやはり道央圏、そして道南圏を回られていらっしゃると思いますが、その次にはぜひこのひがし北海道へ足を延ばしましょうと思っていたきたいですし、実際に延ばしてほしいです。こんな素晴らしいものがありますということをどんどんお伝えしていくべきなのではないかと思っています。

そのためには、やはりその地域、その地域でバラバラに情報発信をしていたのでは、もうお客様に届かない時代になったのではないかと思います。IT 化によって情報がふんだんにある中で、いかにお客様にしっかり情報を届けるか。それはインバウンドの方であっても、国内の方であっても同じだと思います。地域が連携し、ヒト、モノ、カネなど経営資源を結集して、情報発信をしていくべきだと思います。

さらに、これだけ情報がふんだんに流れる世の中になりましたから、関係性こそ、情報が伝わっていくもう一つの重要なエッセンスだと最近感じております。どれだけの方とつながっていけるのか。これが重要なのではないかと。だから SNS もしっかりと活用していく

べきなのではないかと思っています。

また、来ていただいた後に、その地域がどう見えていたのか。先ほどお話しした交通のアナログの見える化や IT の見える化もそうですが、表示物等などがどう見えているのかなど、これもしっかり考えていかなければならないのではないかと思います。

過去の表示物は地元の方がわかりやすいように作ってありましたが、これからの表示物は地域外からいらっしゃった方、特に海外の方がどういうふうに見えるのかを考えて、表示物を構築していくべきではないかと思っております。

そして、北海道新幹線が函館まで開通いたしました。このひがし北海道は少し離れていることもありまして、函館の新幹線をもっともっと活用するべきなのだと行っていきたくところです。しかし、もっと考えなければいけないのは 13 年後、15 年後ですか、札幌延伸がなされる計画になっていますので、これをいかに前倒ししていくかです。このひがし北海道にこれだけお客様がたくさん来ている、函館まで来たお客さんがこんなに来ているということを訴えていけば、きっとその後押しができて、フォローしていけるのではないかと思います。

皆さん、その札幌まで延伸した後の様子をぜひイメージしていただきたいと思います。道東道が全通した後、どれだけのお客様がこの十勝にいらしていただけたか。その母体となる道央圏、札幌を中心とした道央圏に、札幌延伸がなされれば、たくさんのお客様がまた増えるのだと思います。このような取組は、札幌延伸がなされる直前に始めたのでは間に合わないのではないかと思います。今から一步一步確実に、札幌延伸までなされることをイメージして動いていくべきなのではないかと思っています。

そういう意味では、先ほどからお話ししております一次交通と二次交通、それぞれ相互の連携をして、このひがし北海道が、お客様にとって交通充足エリアになっているように見せていく必要があると思います。そのためには先ほど言いました、IT によるアプリの活用をひがし北海道のバス会社全社が導入していただきたい。そのアプリは北海道の 6 割の面積をカバーさせていただくことになりましたので、それがどう見えるかというと、バス会社が複数あっても、お客様から見れば一つのバス会社が走っているように見えるのです。皆さんも東京に行かれたらアプリを使われていると思いますが、複数の事業者をまたいで乗っておられることもあると思います。でも、そこをあまり意識せず行けるのだから、どんどん行こうといって使われているわけで、そのような状況をこのひがし北海道でも作るべきだと思います。一つの会社が運営するように、一つの路線がずっとつながって回っていけるように、そんなイメージを作り上げるのは IT による見える化が一番適していると思っております。

実は、今日ベトナムから帰ってまいりまして、ここに参加いたしました。昨日、ベトナムのバス会社の社長さんに、ぜひこのアプリを使ってほしいとセールスに行ってまいりました。なぜかという、北海道庁さん、北海道観光振興機構さんが、インバウンド対策として、外国語表記をできる予算をつけていただきましたので、今このアプリは外国語表記

ができるようになっております。イコール海外のお客様にも使っていただけると、そういう思いでセールスに行っていました。

もう一つポイントがあります。我々が反対の立場で海外に行くとき、我々が普段使っているアプリが海外でも使えるとすると、スムーズに海外に行っているいろいろな交通を利用して、いろいろなところに行けるイメージになります。この逆をやるためには、北海道、日本で使われているアプリがどんどん海外でも使われて、お客様が日本に来たときに、同じアプリでそのままスムーズに行けるのだと安心できます。あるいは海外の自分の国にいた時点で、既にこの北海道の交通について、しっかりと調べられるようになります。そんなことを作っていかねばいけないのではないかと考えております。

日本から進出しているバス会社にもお願いにいったのですが、ベトナムのホーチミン市で新しい都市開発の中でバスを運行し始めています。現地のバス会社の社長さんは了解していただけたのですが、やはり親会社の電鉄会社さんがありまして、ここにもプッシュをしてほしいと昨日言われました。ここにいらっしゃる皆さんのお力を借りて、電鉄会社さんにもプッシュをすれば、まず一つ目の課題をクリアして、ベトナムでスタートになるかもしれません。そして、東アジア各国にも同じようなことが起これば、この北海道、ひがし北海道にたくさんのお客様を呼び込めることになるのではないかと考えております。

そんなことが実現できる可能性が増してきたのが、今のひがし北海道、あるいは北海道だと思っています。

○小磯氏 ありがとうございます。ベトナムまでアプリの売り込み拡大に行かれたということで、すごい活動だと思います。野村社長のお話は、先ほどのお話でもそうでしたが、カギになる考え方やコンセプトが見える化です。これは置き換えれば、消費者や利用者など、いわゆるユーザーの立場に立って、きっちり戦略を構築していくということだと思います。その中ではアプリもこれからの大事な手段であるのだという思いで、お話をお聞きしました。ありがとうございました。

それでは田中さん、次をお願いいたします。

○田中夕貴氏 網走の市長さんもお話をされていましたが、私の暮らすオホーツク海沿岸は、日本一のホタテ貝の産地で、国内シェアの約 70%を水揚げしております。ホタテの他にもサケ・マスなど、育てる漁業の努力で水揚げ量も大変多く、今では中国の他、EU 諸国へも輸出され、世界水準に引けをとらない食の宝庫といえると思います。

余談ですが、全国 1,700 余りの市町村別住民一人当たりの平均所得額ランキングでは、堂々 5 位にオホーツク北部の猿払村が、42 位に私の住んでいる紋別の隣町・興部町が入っているそうです。どちらも漁業の盛んなところですが、流氷が育むオホーツクの海のおかげで、いかに水産資源に恵まれているかがわかると思います。

また、観光では、ひがし北海道エリアに世界遺産である知床国立公園の他、阿寒国立公園、網走国定公園をはじめ、奇跡の流氷など、世界的価値を有する自然と数々の農作物や魚介類、それらを生かしたバラエティ豊かなひがし北海道のグルメがあり、国内外を問わ

ずあこがれの訪問地で、北海道のイメージそのものを有するエリアだと言われております。

でも、現状では北海道を訪れる外国人でいえば、全体のわずか8%しか道東にはお越しいただいておりません。ポテンシャルは高いのに、道央圏や道南圏に比べて入込客数が伸びていないのは、厳しい交通事情と厳しい地上交通アクセスが問題だと思います。観光客が集中している道央圏、道南圏から、さらにその先の北海道へ足を延ばしていただくためには、道央圏からの高速交通ネットワークの充実と、ひがし北海道の三つの空港に合わせて、オホーツク紋別空港と中標津空港を加えた五つの空港の有効活用と、地上での二次交通の問題解決が重要だと思います。

私たちのまちは、今年2月に紋別商工会議所による「紋別総合戦略ビジョン」を作成しております。民間の発想で、紋別の将来を戦略的に描いたもので、自分たちで考え、行動していこうというものです。今日いらしている小磯先生に大変お世話になって作り上げたものなのですが、観光産業の展開ということでは、域外需要の取り込みと地域資源を活用し、域内循環を高め、地域経済の強化を目指すということを掲げております。そこで、私たちは紋別市と周辺町村と民間企業、そして市民も参加して、官民協働でアジア圏へ地域の物産PRや、観光誘致プロモーションを積極的に行っております。その結果、これまで受入の主流だった新千歳空港利用の台湾や香港からのお客様だけではなく、タイ、インドネシアに続き、来月はベトナムから羽田空港経由で紋別空港を利用してお越しいただくツアーの予約をいただくことができました。

私たちが今すべきことは、各地域としての取組はもちろん大切ですが、エリアとして連携し、ひがし北海道の魅力をもっと発信していく努力が必要だと思います。昨日も東京で、ひがし北海道観光素材説明会を開催し、ひがし北海道の行政や民間団体、企業など70名以上で上京し、旅行エージェントやマスコミ関係の皆様へ、ひがし北海道の魅力をお伝えしてまいりましたが、過去最高のご出席をいただきました。

ひがし北海道が昨年度観光庁の広域観光周遊ルート形成計画に認定されたことが、さらに業界の関心を高めたのだと思いますが、そのことをすごく実感してまいりました。

最後になりますが、北海道として訪日外国人のお客様をさらに多く受け入れていくためには、各観光地を安全で快適につなぐ高速道路とゆたかな景観を楽しむ一般道の整備が進み、個人のお客様でも周遊しやすい観光地、あるいは何度でも訪れたい観光地としてのひがし北海道を目指していくことが、観光立国日本としても大切だと思います。私たちもまた行政に頼るだけでなく、民間も積極的に参加して、さらに連携を深め、3圏域で新たな価値を作り、この広域観光周遊ルートを世界水準のゴールデンルートとなるように努力していきたいと思います。

○小磯氏 ありがとうございます。今、田中さんからご紹介がありましたが、私は昨年度、田中さんのおられる紋別の商工会議所から依頼を受けて、経済団体としての成長戦略ビジョンをつくるお手伝いをいたしました。なかなか難しい作業ではあったのですが、少しご紹介しておきたいのですが、田中さんは今シーニックバイウエイの地元での活動もさ

れています。実は、シーニックバイウェイの取組は非常に面白い。オホーツクの取組だと、オホーツク地域の中での議論になってしまいますが、シーニックバイウェイでは、実はそれを旭川や層雲峡などのルートと結ぶという取組をしておられます。その発想で考えていくと、千歳に降りた方たちが層雲峡から紋別に来るという考え方もできます。そういう中で新しい戦略が見えてきたということもあります。今日はひがし北海道ですが、そういう発想を生かすと、圏域を超えてどんなふうに地域の力を発揮していく可能性があるかという視点で、柔軟な視野を持つことも必要だと思います。そういう中では、シーニックバイウェイは圏域を超えた新しい発想の取組なので、今回の計画議論の中でも随分と議論されました。やはりそのような政策をしっかりと開発行政としても進めていかれることが大事ではないかということを感じましたので、ちょっと付け加えさせていただきました。ありがとうございました。

それでは、帯広市の田中さんをお願いします。

○田中敬二氏 十勝では農業者の方や企業の方々など、十勝の強みである農業と食をテーマとして、地域が同じ方向で地域振興を行うための旗印として、「フードバレーとかち」を推進しております。十勝が有する食の強みは大きく三つに分かれると思います。豊かな生産力と安全安心力、そして研究開発力。この三つだと捉えております。

豊かな生産力では、昨年の農協の取扱高で 3,233 億円で、これは都道府県別で全国 6 位の熊本県と同等の生産力を誇る地域です。

安全安心力については、選果施設や集荷工場などで HACCP 認証対応を実施しておりますし、トレーサビリティの取組もしています。それに十勝独自の統一様式に基づいた生産工程管理手法、十勝型 GAP と呼んでおりますが、こういった取組で安心を消費者に伝える取組を進めております。

三つ目の研究開発力では、帯広畜産大学をはじめとする農業に関する試験研究機関が多く立地しています。機能性食品や加工食品の開発、バイオマスの有効活用など、地域の農畜産物の高付加価値化を促進しており、十勝は量的にも質的にも日本を代表する食糧供給基地であると考えております。

国内においては「フードバレーとかち」が浸透してきております。その結果、山崎製パンや敷島製パン、フジッコなど、その他にも多くの民間事業者が十勝の農産物に関心を示していただき、新たな商品化や高付加価値化に取り組んでいただいているところでございます。

ひがし北海道においても、同様に農業と食が地域の強みであると捉えておりますので、今後は世界に向けても食の魅力を発信していければと考えております。

次に、食と観光の取組であります。今日は商工会議所の方もお見えであります。十勝を代表する食のイベントとして、毎年 9 月に「とかちマルシェ」を開催しております。これは商工会議所が中心となって、5 年くらい前から進めている事業であります。非常に質の高い食のイベントだということで、昨年からは帯広市が相乗りをさせていただいております。

す。規模を倍にして、十勝の厳選素材を扱う 100 の出店者・店舗が集まって、9 月 1 週目の金曜日の夜から始まって、土・日曜まで開催しています。帯広市は人口 16 万人ですが、昨年は 8 万人以上の集客がありました。そのような食のイベントとなっております。道内では「さっぽろオータムフェスト」や旭川の「北の恵み食べマルシェ」などが有名ですが、いずれは十勝だけではなく、ひがし北海道を代表する食のイベントに成長させていきたいと考えているところであります。

また、ここ数年、帯広を中心に、先ほど井田さんが発表されていたような農業を見せる観光やサイクルツーリズム、ヘルスケアツーリズムなども推進しています。昨年度から観光庁の地域資源を活用した観光地魅力創造事業に採択いただいております、国の支援もいただきながら十勝らしい観光開発に取り組んでいるところであります。

さらに、今年から十勝の観光の新しい切り口として、アウトドアを柱としたローカルブランドランディングにも取り組んでおります。十勝の自然そのものを観光素材として、大都市圏で暮らす人々があこがれる、癒しやゆとりに触れられる滞在型観光を提供していきたいと考えております。

こうした取組によって、十勝の世界基準の自然空間を見ていただくことで、これまでとは異なる、新たな、観光客の誘客をしたいと考えており、できれば富裕層の誘客をしたいと思っております。新たな北海道の誘客素材となるよう、精力的に取り組んでまいりたいと考えております。

○小磯氏 ありがとうございます。それでは、蝦名市長よろしく願いいたします。

○蝦名氏 世界水準の食と観光ということでございますが、今、お話があったように食の質を含めて安全安心な食については、世界水準であるということで絶対の自信を誇っているわけでありまして。後はしっかり世界に向けて進めていくことだと考えております。

その中では、観光ということが重要になってくると思っております。釧路市では小磯先生にお世話になりながら、ちょうど 10 年前、観光ビジョンを策定いたしました。観光というものをしっかりとした産業という形で受けとめ、その理念と計画を持とうということで、10 年間のビジョンを示し、経済波及効果等々も出していきながら、観光を産業として位置付けていこうということで計画を作ったわけです。また、そうした意識を市内の中でもしっかりと広げていこうと取組をしております。

今は、その第二弾を策定していくということで、ご準備をいただいているところであります。こういった流れの中で、先般、国の観光立国ショーケースの認定を釧路市がいただきました。長崎、金沢、釧路市の 3 市でしたが、その並びでみると多くの皆さまから「どうなっているんだ？」と言われたところがあったわけでございます。しかしながら、そういった中で、観光立国のショーケースとして選ばれたわけですから、ここをしっかりと進めていかななくてはならないと思っております。まさに 2020 年の東京オリンピック、パラリンピック、そこに向けた中でインバウンド、外国の方々を地方都市の中でしっかりと受け止められる地域として選んでいただいたわけですから、そういった意味でのモデル都市と

して、しっかりと進めていかなければならないと思っております。

その中で重要になってくるのは、一つはwifiもありますが、もう一つは例えばサインの問題、表示の問題があります。実は我がまちもそういった意味では10年前からビジョンを作りながら、サインや表示といったものをしっかりとしていくという話はしていたのですが、なかなか進んでおりません。東日本大震災のときに、釧路でも津波等々がありましたが、昨年5月に、国のお力も借りて、防災庁舎が出来上がりました。出来上がってみてびっくりしたのですが、英語の表示が一つもなかったのです。極めて愕然として、ショックを受けたものです。その横で観光を充実していこうと、何か国語のパンフレットを作り、いろいろなところで配布したのですが、その一方で新しくなった庁舎の中には外国語表記が一つもなかったわけで、極めてショックな話でありました。役所の中では、これは言わないようにと言われるのですが、もう二度と同じ失敗はしたくありません。いろいろなところで言うと、公に言っていることになりますからあえてお話をしていますが、つまりそういうことなのです。

いろいろなところでいろいろなことをやっても、では本当にそういったことを全体として取り組んでいるのかと考えてみると、なかなか取り組めていないことがあると思っています。そこで今は、釧路市内の中でも全てをチェックするのはなかなか難しいので、例えば阿寒湖畔に出ているサインや表示については全て市役所の方で把握しています。狭いエリアなので、国や道、警察など、どこに何が書いてあるということは全部把握しました。

合わせて釧路の駅から中心地、リバーサイドへ向けてのエリアも現在そういったものを全部把握していこうということになっています。どこかサインを変更する際に、どこかだけとか、どこかの組織だけがやるのではなく、その面を100%完璧にしていくことを進めることによって、サイン化のストレスフリーということで、こういったことを取り組んでいこうと進めているところでございます。

こういった形の中で、それぞれが一体となってやらなければならないのです。多いのは市だけでやっていましたが、他はやっていませんでしたとか、国だけでやっていました、でも他は誰も知りませんでしたということです。そういった意味で横軸をしっかりと入れていくということが重要になると考えております。

その点からも、このひがし北海道という中で連携をすることは極めて重要で、これは私が一貫して言っていることであります。それは経済圏と考えてもいいと思います。ひがし北海道は六つの経済圏域に分かれて、十勝、釧路・根室、そしてオホーツクがありますが、それぞれ個別ではなく、ひがし北海道という枠組みになると、若干見栄を張って100万人の人口がいることになります。そうすると普通の県よりは、ひがし北海道の方が多いということになります。このひがし北海道の中では拠点がそれぞれあるので、それぞれをしっかりと札幌とつないでくださいと、今までずっと要望してきたわけです。しかし、このひがし北海道の中のアクセスや様々なことをしっかりと充実することによって、経済として

進められることがあります。そして、その中で独特の地域、地域の観光というものも活用できるとなると、必然的にこの地域はまさしく世界水準、世界一級の地域になってくると考えているところであります。

本日は太田前大臣に来ていただいておりますが、先だっては私どもの国際バルク戦略港湾の着工を決めていただき、本当にありがたく思っております。順調に事業も進んでいるところであります。先日、初めてオホーツクの玉ねぎが釧路に運ばれて、そして、そこから荷物に出されたということがニュースに出ました。ひがし北海道の中の港は、釧路や網走にもありますが、不凍港としては釧路ということになります。しかし、なかなか使われないのです。つまり、北海道の効率を求めて苫小牧に持っていき、そこからすべて運べばいいという考え方でありました。しかしながら、今はいろいろな交通の規制や人の時間の規制など、今度は 1 カ所に集めておいたら非効率になります。人が二人必要だとか、いろいろな対応をしなければならないということになります。

そうすると、やはりひがし北海道の中に、今まで北海道で持っていた機能をしっかり分散しながら、各地で持ちながら、そしてひがし北海道が連携しながら進めていけば、普通の県よりも大きい 100 万人の人口もおりますので、魅力ある地域の中でいろいろなことができるというのが私の思いでございます。以上です。

○小磯氏 ありがとうございます。蝦名市長のお話にありましたが、金沢、長崎とともに観光立国のショーケースに認定されたということは、非常に私も感慨深いものがあります。私は 1999 年、17 年前に釧路にまいりました。当時は水産も駄目、石炭も閉山という状況でした、そんな中で、これからは観光ではないかと議論したのですが、当時は「何が観光だ」というような雰囲気でした。そこで、私が所属していた釧路公立大学地域経済研究センターで 2001 年、2002 年と徹底的に地域の観光者の消費実態を調べ、観光者が消費したお金がどういう形で地域のどこに流れているのかを調査しました。その結果、実は消費を受け止めているのが地域の幅広い産業であることがわかりました。1 次産業の漁業や商業など、当時はあまり観光とは関係ないと思っていた産業分野にも観光消費の波及効果があることを示したのです。その調査結果を持って、漁組に行ったり、コンビニに行ったりして、皆さんも観光消費の影響を受けている観光産業だというお話をしました。そんな取組をしたことを思い出しました。

また、一つの戦略を形にして、それを具体の成果としてショーケースとして認定されるまでに 15 年以上の月日がかかるということも改めて感じました。思い出話をしているわけではなく、戦略のためにはきっちりとした分析が必要で、地域を知ることが大切だということです。そこから課題と可能性を探っていくことが大事ではないかと改めて感じています。ありがとうございます。

さて、第 2 部後段の議論も終わりましたので、太田前大臣にご感想などコメントをいただければと思います。よろしくお願いします。

5. 太田前国土交通大臣のコメント

○太田氏 私からは、それぞれ聞かせていただいたことに対して、いろいろな角度での感想や分析など、考えていることについてご報告をしたいと思います。

国土のグランドデザインを考えるということの第一のものの考え方は、それぞれの都市をコンパクトシティにしていくということです。個性を持つ都市として、地方創生をしていくということが基本なのですが、一つの都市と隣接する都市、あるいはゾーンとして捉える都市間が違う個性を持って、それぞれが生き抜こうとして、初めてそこに対流という物理現象が生まれてきます。同じ個性のものであったら、そこに対流は生まれません。だから、対流を生ずるような個性ある都市というものを作り上げようとして、それぞれの都市が頑張ってもらいたい。それと同時に、連携革命という、点を線にして、連携をしていくという連携革命、対流促進型国土形成ということが一番の大事なポイントであります。

今日、聞いたところでは、その対流促進、あるいは連携革命ということを変な軸に考えながら、道東の発展というものを各市がやっているということについて、さらに進めていただければと思います。

それから、観光には見るもの、食べ物、買い物と三つ揃うことが大事ですが、北海道は特に全国と違い、1カ所に見るものと食べものと買い物が揃っています。今日は北海道ガーデン街道の一つのところにも行かせていただきましたが、十分その中には見るものがあります。また、食べ物もレストランで食べさせていただき、買い物もできます。見るもの、食べ物、買い物という三つの要素が1カ所に必ず揃っているということを持っているところが、北海道であります。それを皆様方に確認をしていただいて、さらにそこに連携をとということです。それゆえに我々としては、道路もちろん一番大事なことから、そこにはさらに拍車をかけていきたいと思っております。

それから、野村さんから公共交通や高速ネットワークというようなお話がありました。一次交通と二次交通の連携というものが大事だということですが、そこは十勝バスが全国のモデルとして活躍をしていただいております。それはブランドですから、そこをさらに磨きあげて、他の地域もそこを磨き上げていただきたいと思います。バスは大変なんだと嘆いていたり、愚痴を言っているところは前進はできません。

それから、水谷市長からはスポーツのお話が出ました。観光が産業として成り立つようになったのは、実はこの3年間で、日本の観光というものが完全に産業としてスタートを切ったということになるかと思えます。これは、推進した私にとっても誇りでありますし、明確に観光が産業になったということです。観光が産業となったときに、例えば道の駅などが非常に重要になるのですが、そこには農業の6次産業化という視点が必ず出てきます。見るもの、食べ物、買い物、そして道路網と道の駅等々、その中に6次産業化というものがついていくということが流れの中で行われます。

その後に、スポーツを産業ということを実は私も主張していて、去年の暮れから総理や官房長官に言っております。10年前に日本のスポーツ産業の収入は5兆円でありましたが、

これがアメリカでは日本円にして当時 10 兆円だったのです。それが、今 10 年経ってみますとアメリカはスポーツ産業としてグッズを売ったり、あるいは野球場に行ったりも遊園地に行ったり、食事をするなど、いろいろな分野に広がっています。日本の場合はまだ野球を見るだけに終わっていますが、1 日楽しんでいけるというようなことがあったりしますし、マラソンなどは毎週のように全国各地で行われています。東京マラソンなどは、参加料が 1 万何千円かなのですが、参加希望者が溢れてしまって抽選になります。10 万円出すと必ず走れるというものですから、10 万円出して走りに来る人がいっぱいいるという状況で、毎週、全国のどこかでマラソン大会が行われています。そのような状況を利用しないという選択肢はないでしょう。いろいろな意味で、スポーツがこれからの産業になっていくということで、そのスタートであります。水谷市長のお話は、そこに狙いを定めて、これからスポーツが、一つの産業になっていくということで、これをどうかそれぞれのところでも心がけていただければと思っております。

北海道新幹線がついに函館まで来たということで、私には大変な喜びです。しかし、札幌までは 3 時間 50 分なのですよとか、3 月 26 日にスタートを切ったのですがいきなり乗車率が低いのですよねとか言う方が、東北にも、北海道にもいらっしゃいます。トップクラスの人に私が言っていることは、そういう愚痴を言っているようではしょうがないということです。3 時間 50 分なんて言うのではなく、また乗車率が低いとか言うのではなく、ゴールデンウィークは楽しみですねとか、夏が楽しみだねとか、そういうふうに言いなさいとお話しています。3 時間 50 分だからなんて言わずに、函館まで行けば洞爺湖までは 1 時間半で行ける、そして洞爺湖から札幌までも 1 時間半で行けるというように言えば、人は「行こうかな？」と思うものです。旅行会社もそう思うものです。ものごとは前向きに捉えて発信をしていかないと駄目です。一般の新聞等で出ている情報の他に、今世の中はどう動いているかといいますと、そういう表の情報とともに SNS やインスタなど、その瞬間の情報が発信されています。例えば、私が誰々とどこか道路で立って話をしているなんていうことは、私が家に帰る前にもうインターネットで発信されているという世界になっているのです。実は、情報というのはものすごく今は変わってきています。世の中の動きは、今までの新聞やテレビとは違った世界のものが出ています。観光地も素晴らしいと思った瞬間に、それが直ちにインターネットでそれぞれの国につながって、話題になるということが大事だと思います。

できるだけ前向きに、前向きに考えていくことが大切です。3 日前に水戸泉が結婚式を行いました。53 歳で初婚です。相手の方が中標津の方で、小野さんとおっしゃって、大変美人で背が高く、そしてオペラ歌手と素晴らしい人にめぐり会ったのです。1,000 人以上も来たところで、私とその仲人役みたいなことだったのですが、石田純一がマイクを持ちまして、年齢差は全く問題ないということを私が証明しますというようなお話をしていました。私の隣が広尾町出身で、現在日本相撲協会の理事長の北勝海さんでした。

私は本が好きなのですが、この 1 年半くらいの間で私が一番素晴らしい小説だと思った

のが、角川から出ている『颶風の王』という本です。読まれた方はいらっしゃいますか？馬が道東にきて、そこである島に生き残っているということを書いた小説ですが、この2年間で読んだ中では最高の小説だと思います。そういう小説一つにしても、結婚式であっても、あるいは新幹線が函館にきたとしても、それを前向きに捉えて発信する、そのポジティブな考え方が反響を呼んでいくという世の中になってきています。このことを知らなくてはいけないのではないかと、自省も交えて私は思っています。

田中さんが資料に地図をいつも提供してくださっていますが、私たちの感覚からいきますと、網走と釧路がこんなに近いとは思ってなくて、ものすごく離れているような気がします。帯広、釧路、それから網走、そして田中さんの紋別とありますが、JALにも日航にも女満別空港の便が少なすぎるから、そこを増やすようにと私は常に言ったりしています。どんなときにも話を聞いたりして、前向きに、前向きにものを持っていくということで、絶対素晴らしいポテンシャルを持っている道東は、大きく発展すると私は思っております。今日発表された方々のことを形にするためには、大変なことがいっぱいあるでしょうが、一緒になって頑張っていきたいと思っております。この場に座っておりますと、何となく私も道東の一員のような気がしてまいりました。皆さんと一緒に頑張っていきたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

○小磯氏 太田前大臣、ありがとうございました。今日のパネルディスカッションを締めくくるにふさわしい、このひがし北海道地域に対する熱い思いを述べていただいたと思います。今の太田前大臣のメッセージは、一言で言うと前向きな気持ちで向き合おうよというメッセージだったと思います。太田前大臣は、観光行政、交通行政、北海道開発行政を長年にわたって、責任あるお立場で政策を進めておられた方です。今日この地域の応援に来ていただいたということは、本当に我々としてもうれしく思いますし、引き続きこの地域へのご支援、サポートを心よりお願いをしたいと思います。以上で一応予定された時間がまいりました。

聴衆の皆さんも本当に大変熱心に聞いていただきました。ありがとうございました。これで本日のパネルディスカッションを終了したいと思います。どうもありがとうございました。

6. 閉 会

○小林開発計画課長 パネリストの皆様方、コメンテーターをお務めいただきました太田前大臣、そしてコーディネーターをお務めいただきました小磯先生、本当にありがとうございました。ご来場の皆様、今一度大きな拍手をお願いいたします。

ありがとうございます。お座りください、ありがとうございました。

本日、皆様からいただいた貴重なご意見を踏まえまして、私ども国土交通省といたしまして「前向きに」北海道開発に取り組んでいきたいと思っております。皆様方とともに、よりよい北海道、そしてよりよい我が世界の北海道を目指して頑張りたいと思っておりますので、ご支

援、ご協力よろしくお願いいたします。

本日は長い時間お集まりいただきまして、ありがとうございました。これをもちまして、本日のひがし北海道価値創造パートナーシップ会議を終わらせていただきます。どうぞお気をつけてお帰りください。どうもありがとうございました。